

한일교류 작품 콘테스트

2024

韓日交流 作文 コンテスト

作品集

応募部門
6 部門

エッセイ

日本語エッセイ 中高生部門
韓国語エッセイ 中高生部門
日本語エッセイ 一般部門
韓国語エッセイ 一般部門

川柳・俳句

日本語川柳・俳句部門
韓国語川柳・俳句部門

〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、韓国コンテンツ振興院、東京韓国教育院
〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 〔協力〕 韓国観光公社、韓国農水産食品流通公社

A decorative cloud-shaped frame with a blue border and a green grid pattern. Inside the frame, there are illustrations of a blue pen, a red pencil, and a small grey building. The text "2024 韓日交流 作文 コンテスト" is written in black.

2024 韓日交流 作文 コンテスト

A dark blue ribbon banner with a slight 3D effect, containing the text "作品集" in white.

作品集



〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、韓国コンテンツ振興院、東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院

〔協力〕 韓国観光公社、韓国農水産食品流通公社

INDEX

実施概要	4
審査結果	6
審査評	9

受賞作品

日本語エッセイ中高生部門	14
日本語エッセイ一般部門	21
韓国語エッセイ中高生部門	28
韓国語エッセイ一般部門	35
日本語川柳・俳句部門	42
韓国語川柳・俳句部門	44



コンテストポスター



実施概要

事業名

韓日交流 作文コンテスト2024

～ 皆さんの想いを伝えてみませんか ～

【日程】

- 作品募集：2024 年 4 月 22 日（月）～ 8 月 19 日（月）
- 審査（1～3 次）：2024 年 8 月 20 日（火）～ 9 月 5 日（木）
- 審査結果発表：2024 年 9 月 6 日（金）
- 受賞作品展示：2024 年 9 月 30 日（月）～ 10 月 12 日（土）

【趣旨】

次世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句を募集し、表彰する。

【募集部門】 全 6 部門

<エッセイ>

日本語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
 韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
 日本語エッセイ 一般部門：一般の方が対象
 韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

<川柳・俳句>

日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象
 韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象



【応募規定】

<日本語エッセイ（中高生・一般）部門、韓国語エッセイ（中高生・一般）部門>

◆ テーマ（次の中から択一）

- A 韓国文化（例：韓服、韓国語など）
- B 韓国コンテンツ（例：K-POP、ドラマ、映画、ゲームなど）
- C 韓国観光（例：私の 00 旅行記、おすすめ旅行地など）
- D 韓国料理（例：キムチ、ビビンバ、トッポギなど）
- E 韓日交流（例：私が考える韓日交流、韓日の未来など）

<日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門>

◆ テーマ

自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

【審査方法】

駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

【審査員】

◆ 日本語エッセイ（中高生・一般）部門

呉英元〔二松学舎大学名誉教授・駐日韓国文化院 世宗学堂長〕
 桜井泉〔ジャーナリスト、元朝日新聞記者〕

◆ 韓国語エッセイ（中高生・一般）部門

李允希〔元東京成徳大学教授〕
 南潤珍〔東京外国語大学教授〕
 武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

◆ 日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門

兼若逸之〔元東京女子大学教授〕
 チョ・ヒチョル〔日本薬科大学 客員教授、元東海大学教授〕





審査結果

(総応募作数：4,007 作)

日本語エッセイ 中高生部門 (応募作数：224 作)

最優秀賞 (1 名)

山口 穂香 (玉川聖学院高等部)

優秀賞 (2 名)

金本 姫奈 (湘南白百合学園高等学校)
石田 あかり (東洋大学京北中学校)

佳作 (4 名)

石倉 紗英 (高崎健康福祉大学高崎高等学校)
藤井 妃菜美 (長野県長野西高等学校)
八木 こころ (城西大学附属城西高等学校)
山内 千鶴 (実践女子学園高等学校)

入選 (12 名)

中谷 凜 (育英西高等学校)
田原 柚実 (鳥取県立境高等学校)
矢嶋 彩美 (山形県立天童高等学校)
伊藤 彩貴 (東京都立青梅総合高等学校)
小泉 瑛太 (神奈川県立秦野総合高等学校)
渡邊 未桜子 (静岡雙葉高等学校)
吉田 茜 (沖縄県立開邦中学校)
柴田 優衣 (三輪田学園高等学校)
島田 かれん (共立女子高等学校)
在原 瑞歩 (立教池袋高等学校)
竹野 友生花 (東洋大学京北中学高等学校)
楠本 雪乃 (長崎県立佐世保工業高等学校)

日本語エッセイ 一般部門 (応募作数：198 作)

最優秀賞 (1 名)

薛 禮子 (兵庫教育大学)

優秀賞 (2 名)

富沢 より子 (東京都)
太田 久琳 (東京都)

佳作 (4 名)

中村 幸子 (神奈川県)
松崎 花菜 (帝塚山学院大学)
水口 さか (神奈川県)
高橋 柚香 (神奈川県)

入選 (12 名)

長田 秀樹 (大阪府)
後藤 里奈 (東京都)
中村 裕子 (沖縄県)
有賀 裕美 (東京都)
中村 碧 (東海大学)
斉 智司 (埼玉県)
白 恵俊 (東京都)
本名 愛子 (東京都)
江村 優希 (東京都立大学)
下吹越 直紀 (東京都)
鈴木 猛敏 (東京都)
松本 哲佳 (信州大学)

韓日交流
作文
コンテスト



韓国語 エッセイ 中高生部門 (応募作数：96 作)

最優秀賞 (1 名)

久保 直香 (山口県立山口高等学校)

優秀賞 (2 名)

平田 大葵 (群馬県立中央中等教育学校・エムズ英会話)
稲垣 郁菜 (京都国際高等学校)

佳作 (4 名)

佐々木 夏妃 (滋賀県立国際情報高等学校)
坂東 優希菜 (大垣日本大学高等学校)
福島 実夏 (千葉県立松戸国際高等学校)
藤井 千裕 (盈進高等学校)

入選 (12 名)

山本 雅 (京都国際高等学校)
西澤 現 (京都国際中学校)
本城 花奈 (福岡県立博多青松高等学校)
古川 瑠夏 (神田女学園高等学校)
伊藤 結 (松本深志高等学校)
外松 咲希 (鷗友学園女子高等学校)
中山 歩咲 (実践女子学園高等学校)
松村 早葉香 (福岡県立城南高等学校)
北原 桃々 (長崎県立対馬高等学校)
前田 恋実 (酒田南高等学校)
岩崎 晴 (東京都立国際高等学校)
磯島 蘭 (岡山市立岡山後楽館高等学校)

韓国語 エッセイ 一般部門 (応募作数：239 作)

最優秀賞 (1 名)

山極 尊子 (埼玉県)

優秀賞 (2 名)

南口 江美 (東京都)
藤原 亮輔 (岩手県)

佳作 (4 名)

齋藤 可奈 (新潟大学)
滑川 理美 (東京女子大学)
春日 智子 (東京都)
目黒 由貴子 (北星学園大学)

入選 (12 名)

伊藤 空流 (北海商科大学)
湯澤 葉子 (東京都)
神谷 歩実 (東京外国語大学)
山口 朋夏 (新潟大学)
川村 文 (東京都)
草野 洋子 (千葉県)
飯村 康代 (東京都)
田中 俊哉 (長野県)
八重樫 杏奈 (専門学校神田外語学院)
遊佐 知佳 (東京都)
谷口 彩月 (石川県)
武市 圭悟 (帝塚山学院大学)

日本語川柳・俳句部門 (応募作数：2,066 作)

最優秀賞 (1 名)

田ヶ谷 直美 (埼玉県)

優秀賞 (2 名)

堀 綾子 (東京都)
村田 香織 (埼玉県)

佳作 (4 名)

新澤 明子 (大阪府)
山口 幸子 (静岡県)
高木 弘子 (茨城県)
岩田 美桜 (洗足学園高等学校)

入選 (12 名)

横山 沙季 (神奈川県)
坂口 直子 (東京都)
岩瀬 瑠那 (八千代松陰高等学校)
阿久津 理央 (新潟大学)
宮本 恵美 (広島県)
紺野 一恩 (北海商科大学)
武山 和彦 (宮城県)
鳴海 理香 (青森県)
林 京乃佑 (立教池袋高等学校)
薬袋 太一 (山梨県)
中川 和也 (東京都立大学)
小野 将京 (東京都立大学)

韓日交流
作文
コンテスト

韓国語川柳・俳句部門 (応募作数：1,184 作)

最優秀賞（1 名）

森 勸喜（慶應義塾大学）

優秀賞（2 名）

安倍 遥菜（新潟大学）

白田 卯見（京都国際中学校）

佳作（4 名）

伊藤 大河（電気通信大学）

谷垣内 鮎乃（大阪府）

明 ハル（白頭学園 建国高等学校）

瀧脇 真優菜（東京都）

入選（12 名）

水落 一衣（新潟大学）

景山 葉那（鳥取県立境高等学校）

早田 美央奈（京都国際高等学校）

山本 省吾（電気通信大学）

平川 和美（神奈川県）

北原 里桜（北海商科大学）

三浦 心（北海商科大学）

土田 滯那（北海商科大学）

松本 和桜（千葉県）

齊藤 楓（新潟県立大学）

大橋 鈴々（東京都）

濱田 恵美（埼玉県）

賞

最優秀賞（各部門 1 名、計 6 名）

賞状、副賞（韓国往復旅行券 1 名分）

優秀賞（各部門 2 名、計 12 名）

賞状、副賞（LG ポータブルスピーカー）

佳作（各部門 4 名、計 24 名）

賞状、副賞（SAMSUNG ブルートゥースイヤホン）

入選（各部門 12 名、計 72 名）

賞状、副賞（韓国語学習書）

韓日交流
作文
コンテスト

審査評

日本語エッセイ 中高生・一般部門 審査評

呉英元（二松学舎大学名誉教授）

新たに進む希望の時代へ

受賞者の皆様に心からお祝い申し上げます。

今年は旅行記部門をエッセイの方に統合して部門が減り、副賞も縮小された状況であったにも拘わらずお陰様で昨年に引き続き応募作品数が 4 千台を記録したとのことで喜ばしく感謝申し上げます。

日本語エッセイ中高生部門では、若さの純粋性や労わる気持ちが美しく成熟豊かな響きに感動させられました。最優秀賞は、山口穂香さんの「言葉の宝探し」。

「新型コロナウイルスが流行し、自粛期間が始まった 4 年前。中学生だった私は、独学で韓国語の勉強を始めた。」と、「好きな韓国アイドルと話してみたい、その一心だった。それだけだったはずなのに、4 年に渡るこの学びは、私にとって“言葉の宝探し”となった。」という最初の文章から韓国語と日本語の“사랑 받다” “아프지마” など訳で深いニュアンスまで正確に比較しながら理解しています。また、「韓国人の言葉はストレートで温かい。’할 수 있어’ “네가 하고 싶은 데로 하면 돼” という言葉は、相手に勇気を与え、労わる気持ちや心配する気持ちがよりストレートに伝わってくるように言っています。それに「ホームステイ中、ニュアンスの違う表現に、「韓国語のその表現やっぱり素敵だな…」と、何度言葉の奥深さを実感しただろうか…。」というところでは言語学的な才能があるように感じられました。

優秀賞は、金本姫奈さんの「私が願う韓日の未来」。「2007 年 1 月、在日韓国人 3 世の父と、父との結婚を機に日本にきた韓国人の母との間に私は生れた。」と始まる文章で話に引き込まれました。「そんな私が小学校 4 年生の頃、K-POP を好きになった。」と、「テレビに映るあの人も、私と同じ国の人なんだ。」と思うと韓国人である自分が少し嬉しくて、その頃から常に頭の片隅に「自分は韓国人である」と言うアイデンティティが生まれたと思ったと。その頃は、友達に韓国人であることを隠したりすることなく、むしろ少し自慢げに話していたことを覚えていたと。しかし、中学生に入り自分のアイデンティティに違和感を感じ始めた。と。友達の家で K-POP の話をしていた時、友達の妹が「私韓国人嫌いなんだよね」との発言でショックを受け、周りの否定的な発言が多くあり、見るたびに心が痛く、しかし、弟の「僕は韓国人であることを誇りに思っているからね」と言った言葉聞いて、「自分のアイデンティティについて一度よく考えてみた。」と。「なぜ韓国人である私が韓国人であることに後ろめたさを感じなきゃいけないのかと、もう少し自分が韓国人であることを堂々としてみようと思った。」と、「韓日の間には解決すべき問題が多いのが現実だが和解が進み韓国人も日本人もお互いに差別や偏見がなくなり、私のような悩みを抱えている人も、韓国人であることを堂々としていられる社会になることを願う。と最後にまとめていました。

日本語エッセイ 中高生・一般部門 審査評

桜井泉（ジャーナリスト）

きっかけは韓流、さらに一歩進んで

K ポップやドラマなど韓流の人気は、とどまるどころを知りません。皆さんの作文を読むと、好きな韓国文化を入り口にして隣国に関心を持ち、言葉や歴史を学び、交流を深めていく人たちが増えていることがよく分かります。

今年から中高生と一般（大学生を含む）の二部門に分けて作文を募集しました。将来の日韓関係を担う人たちに積極的に応募してもらい、若い感性にあふれたた作品を紹介したいからです。受賞が進路を決めるきっかけや励みになればうれしいです。

中高生部門の最優秀賞は、玉川聖学院高等部の山口穂香さんの「言葉の宝探し」です。中学生のときから独学で韓国語を学んだのは、好きなアイドルと話してみたいという一心からでした。ここまでは、よくある内容です。しかし山口さんは、一歩ずつ進んでいきます。ドラマを見ながら聞こえる韓国語と、日本語の字幕の微妙な違いが気になりました。韓国語には独特の言い回しがあるのです。そうした体験を「言葉探し」と表現し、タイトルにしたのもよかったです。

さらに姉妹校との交流のため韓国を訪れました。韓国人と会話したことがないので、韓国語が果たして伝わるだろうか。話してみると、韓国人のストレートな言葉に温かさを感じました。きっかけはアイドルから。そして言葉に関心を持ち、交流を通じて韓国人を知る。世界はどんどん広がりました。

一般部門の最優秀は、大学院生の薛禮子さんの「ビューティフル・ネーム」です。幼い頃、韓国籍であることを明かして差別されたことがあり、通称名で生活してきました。支えになったのが、コリアンにルーツがある作家、鷺沢萌（さぎざわ・めぐむ）さんの作品「ビューティフル・ネーム」でした。自分の民族名も大切にしながら前に生きよう。そんなことを学んだそうです。

日本では植民地支配という歴史もあり、韓国・朝鮮人に対する差別が深刻でした。1923 年 9 月の関東大震災では、朝鮮人が井戸に毒を入れたなどとするデマが広がり、無実の朝鮮人がたくさん虐殺されました。戦後になっても、就職や結婚などをめぐる差別や偏見が続きました。

「それはよくない」という意識が少しずつ広がり、日本社会は、多文化共生に向かって歩んでいるようにも見えました。ところが近年、マイノリティへのヘイトスピーチ、ネットや SNS での攻撃がひどくなっています。そうしたことの悩みを打ち明ける作文も、いくつか寄せられ、事態の深刻さを感じました。

日本は、少子高齢化という現実と直面し外国人に門戸を開きつつあります。戦乱が絶えない世界から安住の地を求めて来る人もいます。「自己紹介がづらい」。薛さんのような体験をする人がいてはいいけない。読む人にそんな思いを強くさせる内容でした。

「ソル・イェージャ」さん。あなたの名前は美しい。鷺沢さんの「ビューティフル・ネーム」とともに、多くの人に読んでもらいたい作品です。

韓日交流
作文
コンテスト



審査評

韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

李允希〔元東京成徳大学教授〕

今年は募集要項が変わり旅行記部門がなくなりましたので、応募者数がかなり減ると予想しておりました。しかし、予想とは異なり今年も例年通り数千通の応募がありました。特に中高生部門の応募者数の増加は著しく、日本の青少年の韓国や韓国語に対する関心度が年々増えていることがうかがえます。

応募していただいた大勢の皆様深く感謝申し上げます。

審査においては、韓国への切実な思い、美しい表現、深い感動に重みをおいた作品選びを致しました。

韓国語エッセイ一般部門の最優秀賞は、読んでいうちに自然と涙が流れていた作品です。今尚読み返しても感動の渦に巻き込まれていく素晴らしい作品です。美しく清閑な自然の中で交わされる日韓の友情には、作品を読む誰もが感動を覚えることでしょう！日韓の人々にも作品の中の二人のような思いやりの心が宿ることを願っています。

優秀賞の一作目は、お節介な韓国のおばさん達の独特なゴルフ文化に戸惑いながらも韓国の温かい「정(情)」を見事に表現した作品です。文の結びに綴られている「언니들 ~ 막내가 언니들 사랑하는 거 아시죠? 우리 오늘도 아줌마 파워로 오잘공! (お姉さん達、末っ子の私が姉さん達を愛しているのを知っていますよね? 私達、今日もおばさんパワーでベストショット!）」は、韓国文化を理解し、溶け込み、モノにした証として生まれた文ですね！

優秀賞の二作目は、作品の中の上司だけでなく誰でも박장대소(大笑い)するはずの微笑ましい作品です。韓国語の꿀맛を素直に「蜂蜜の味」で理解してしまった執筆者が遭遇した困った場面を想像すると、笑わずにはいられません。私に何度も読み返す楽しい꿀맛の時間を与えてくださったことに感謝します。

韓国語エッセイ中高生部門の最優秀賞は、韓国へ行きたい切実な思いが見事に表現された作品でした。毎晩スマートフォンで韓国の街を訪れ、その風景の中で笑っている自分を夢見、夢が現実になることを祈りながら綴った作品です。副賞の航空券で韓国へ行き、さらなるフォーン旅行記が続けられ、美しい思い出が増えることを祈ります。

優秀賞の一作目はキムチを多彩な食材と愛情が統合した「赤い宝石」と表現した作品です。韓国料理が好きなお母さんの손맛(手作りの味)にお母さんといっしょに漬けた暖かく懐かしい味が加わった特別なキムチを未来の子どものために伝えたい気持ちがじゅくじゅくと伝わる作品でした。

優秀賞の二作目は아재계고(オヤジジャグ)をテーマとした面白い作品でした。「面白い」という韓国語를 재미 있어 [재미있어 체미 이썬](ジャムがある)、「この世で一番幸せな海」를 사랑 해 [사랑 해](愛の海)とユニークな表現が出ていました。これからも아재계고で人々に笑いを与え、ユーモラスな執筆者自身を달달하게 사랑하며(甘々と愛しみながら)生きていくと綴られていたので、とても明るく楽しい気分になりました。

来年も素晴らしい作品に出会うことを期待します。

韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

南潤珍〔東京外国語大学教授〕

韓国語のエッセイ部門(一般・中高生)の審査をさせていただきました。今年も内容面、文章の構成において完成度の高いものが多く、特に今回は韓国旅行記がエッセイ部門に統合されたこともあり、枠にとらわれない個性的で斬新な作品が多かったと思います。そのため、入賞作を選ぶのに一苦労でしたが、素晴らしい作品の数々と出会える大変楽しい時間でした。ここに応募者の方々に感謝の気持ちをお伝えいたします。

選考の過程でもっとも重点をおいたのは、与えられたテーマを自分のことばで表現しているのか、書いた人の人柄や考え方が伝わっているかでした。

韓国語エッセイ部門のテーマは、「韓国文化、韓国コンテンツ、韓国観光、韓国料理、韓日交流」ですが、固くなりがちなテーマを自分の考えに砕いて実体験につなげて物語にした個性あふれる作品が多かったと思います。この点に関連して、特に中高生部門の作品において変化を感じました。エッセイは書く人の人生、感性、考えが反映されるものとよく言われますが、これまでは中高生に比べ人生経験の豊かな一般の方々の作品の方がよりエッセイとして厚みのある、個性的な作品が多かったのが事実です。しかし、今回の出品作では、若い世代の感性豊かな個性的な作品が多かったと感じます。韓国語の学習歴や人生経験にかかわらず、自分の伝えたいことを自分らしく表現することを意識している作品が増えたともいえるでしょう。この作文コンテストの審査で、「日本語・韓国語といったことばの違いに関係なく、真心こめた個性の表現が大事」と伝えてきましたが、その思いが伝わった結果なのではと、自分勝手ながら大変嬉しく思っているところです。

紙面の関係上、すべての作品に対する個別のコメントはできませんが、上述した「個性の表現」の例としていくつかの作品について述べます。中高生部門の最優秀賞に選ばれた作品は、スマートフォンの地図アプリを利用した仮想の韓国旅行を描いた後、その体験を実世界に巧みに結びつき、一つの「作品」として紡ぎ出したと高い評価を受けました。一般部門の最優秀賞作は、韓国旅行で活力と自信を取り戻した経験を淡々と述べていますが、やはりその中心には人がいたことを伝える、旅行記でありながら人とのつながりを語るエッセイとして完成度の高い作品と評価されました。私個人的には、韓国語の単語をキーワードにし、いろんな出来ことをつなげていく、ことばの力を活用した作品が中高生部門・一般部門ともに出品されたことが印象的でした。韓国語学習の成果と個人個人のウィットとセンスが光る魅力的な作品でした。

以上、感じるままを記しておきました。これからも韓国・韓国語との出会いを通じて新しい自分の発見の機会が増えることを期待します。

韓日交流
作文
コンテスト



審査評

韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

今年も多くの応募を有り難うございます。いずれも力作でしたが、例年にましてエッセイとして質が高く、文のテンポの良い作品が多かったように思います。特に一般部門の佳作以上の作品は、どれも最優秀賞に選ばれてもおかしくないものでした。興味深いことに、中高生部門と一般部門で好まれるテーマに違いがありました。中高生部門の多くは韓国コンテンツをテーマに選んだのに対して、一般部門では韓国文化、韓国旅行が中心で、韓国コンテンツは少なかったのです。世代による関心の違いでしょうか。

中高生部門の作品も、エッセイとして質が高いくだけでなく、切り口の面白い作品が多くありました。なかでも、最優秀賞の「한국관광」は、自分だけの「폰 여행」から話をおこし、実際に韓国に行き「폰 여행」をした場所へ行ったこと、そして日本に帰ってからの思いなどがテンポ良く書かれたもので、その時の様子が想像できるすばらしいものでした。優秀賞の「붉은 보석 ~ 마음속에 빛나고 ~」はお母さんの作るキムチへの思い、「재미없어? 냉장고엔 쟈미 [재미] 있어!」は自分の経験とそれから得たこと、そしてそこから見えてきた将来の夢まで読ませるものでした。

これら3点は、いずれも、自分の経験をもとに展開しています。その経験は、一見すると誰でも経験できるようなものです。しかし、それぞれの筆者にとっては特別な経験だったことが文章から分かります。その「特別な」経験を軸にすることによって、文章が生き生きとし、説得力のあるものになっています。このことは、ほかの佳作や入賞作品でも同様です。

エッセイは自由な形式で、自分の見聞や経験、意見を書くものです。見聞や経験は、自分が伝えたいことのために触れるものです。賞を取った作品は、選んだタイトルに対する自分の意見と、文中の見聞、経験がうまく関連付けられていたものです。

言いたいことを伝えるためには論旨が一貫する必要があります。論旨が一貫しないために、何を言いたいか、どうしてそういう結論になるのか読み取れないものや、タイトルと内容の関係がよく分からないものも見られました。見聞や経験しか書いておらず、筆者の意見が書かれていないものや、いろいろなものを詰め込み過ぎて結果的に論旨が曖昧になってしまったものもあり、残念に思いました。

できれば、まず日本語で書いて表現を整理しましょう。思い切って文を削ることも大切です。投稿された文章は、自分以外の人が読むものです。読んでくれそうな人の顔を思い浮かべながら書いてみましょう。そうすれば、その人が楽しんでくれそうな書き出しや、文章の進め方、表現の工夫ができると思います。できれば韓国語にする前に誰かに読んでもらいましょう。そして感想を聞いて、それを作品に活かすと、よりよい作品になると思います。

ぜひ、また挑戦してください。そこには、きっと成長した自分を発見できると思います。

韓日交流
作文
コンテスト

日本語川柳・俳句部門 審査評

兼若逸之〔元東京女子大学教授〕

例年になく暑さが9月半ばになっても続いています。こうした中でもハングル俳句・川柳(日本語)に多くの方が応募してくださり、心から感謝しております。今回も上位3句を中心に講評をさせていただきます。

今年の俳句・川柳部門での大きな特徴として、略語が多く使われていることが挙げられます。これまでスマホでは「ㅋㅋㅋ(笑い)」、「ㅠㅠ(泣き)」、「ㅇㅋ(OK)」などがよく使われていましたが、最近富に増えているのが、「아아(아아)」、「아바(아바라)」など「コーヒー系」の略語です。それぞれ「아이스アメリカン」、「아이스바닐라테」ですが、「얼죽아: 올챙이가 얼어 죽어도 아이스 커피」: 凍え死んでもアイスコーヒー」のように説明されないといけないものが出てきています。コーヒー系以外にもたくさんあり、などなどにも「소가 웃는 소리」를 세 글자로 줄이면?: 牛が笑う声を3文字に縮めれば?」で「우하하: 우하하(「우: 牛の音読み」が「하하」と笑うの意)」と答えさせたり、「개가 사람을 가르친다」를 네 글자로 줄이면?: 犬が人を教えるを4文字では?」で「개(犬と同じ発音の個) 인지도(個人指導)」が答えというのもあります。短縮形で答えさせるものはいくつもありますので、興味のある方は探してみてください。

優秀賞の「短縮語伸ばして脳のストレッチ」(村田香織さん作)はこうした背景から生まれたのでしょうか。どんな言葉を短くしたものか、ゆっくり考えてみるのも脳の敏に刺激を与え、そのことがいつまでも若くいられる秘訣となっているのかもしれませんが。最近特に問題となっている認知症対策の一つとしてもなかなかよいのではないかと思います。

もう一つの優秀賞の「キムジャンのやさしさ熟しおすそ分け」(堀綾子さん作)はキムチ漬けしたあとのキムチの熟したものを言っているのではなく、キムチ作りのチームワークの良さや温かさなどを知人や周りの人に伝えていることを詠っています。キムチが熟すのはまだ先ですが、みんなで作ったキムジャンには人と人との愛情が込められていて、もうそれは熟した段階にあるのだという発見を巧みに俳句にしました。本当に暖かきの詰まった句で、心が温まります。

最優秀賞の「보자기縫うはぎれもすべていとおしく」(田ヶ谷直美さん作)は着物や服、スポン、スカートなどの端切れを一定の大きさに切り取り、繋ぎ合わせて보자기(風呂敷や布)を作ることを趣味があるいはお仕事でなさっているのでしょうか。보자기는歴史も古く、福を呼ぶものとしてもよく知られています。模様や色の組合せが多様で、作品の種類も豊富です。作者はこうした作品に一针ごとに愛情を込めて縫い進めているのでしょうか。

SDGs(エスディーゼーズ)との関連もあるようです。長い伝統と新しい概念とがうまく融和したこうした活動が輝く未来へと続くことを願っています。

これらの他にもすばらしい句がいくつもありました。次回の応募もよろしく願いたします。



審査評

韓国語川柳・俳句部門 審査評

チョ・ヒチョル〔日本薬科大学 客員教授〕

昨年、「韓国語川柳・俳句部門」には 867 作品の応募がありました。今年はさらに増えて 1184 作品になりました。昨年より 3 割以上も増えた理由としては、韓国語学習者の増加はもちろんのこと、本作文大会に興味を持って下さる方の増加もあったと思います。

今年も例年のように、各地域、また、各年代から多くのユニークな作品が集まりました。多くの作品は K-POP や韓国ドラマ、または韓国料理を題材にしたものですが、中にはあまり知られていない文化を取り上げた作品もありました。これを機に、日常生活の中で感じたことを毎日 1 句ずつでも書き続けられ、韓国語で川柳・俳句を書く実力も伸びていくに違いありません。

今年、「最優秀賞」に選ばれた作品は、森勸喜さんの

・ 손님 오이쇼! 웃으며 내 손 끄는 부산 아지매

(お客さん、いらっしゃい! 笑いながら私の手を引く釜山のおばさん)

この作品は、珍しく釜山の方言をちりばめた秀作です。まず、「손님 오이쇼!」の「오이쇼!」は「오세요!」、また、「아지매」は「아줌마」の釜山方言です。この句からは釜山の海鮮市場で、お店の아지매が元気に客引きする風景が思い浮かびます。

また、「優秀作」はまず、安倍通菜さんの

・ 매운 찜개에 빨개진 내 얼굴 보고 오해한 남자친.

(辛い鍋に真っ赤になった私の顔見て誤解した彼)

という作品です。

この句は辛いチゲを食べて顔が真っ赤になったのを、恥ずかしがって真っ赤になったのだと相手の男性が勘違いしてしまったということでしょう。ちなみに「남자친」は「남자 사람 친구 (男の人の友達)」の略語で、彼氏ではなくただの男友達のこと、つまり「友達以上、恋人未満」に近いことです。

もう一つの「優秀作」は、臼田卯見さんの

・ 무궁화처럼 나의 꿈도 희망도 피어나기를.

(ムクゲのように私の夢も希望も咲き誇ることを)

という作品です。

この作品は韓国の国花のムクゲを題材にし、自分の夢と希望をムクゲに託したいという気持ちを詠った素直な作品でした。

また、佳作として 4 作品が選ばれました。

伊藤大河さんの

・ 그런데인가 그래서가 아닐까 아냐 그러면.

(「ところで」なのか、「それで」かな、いや「では」かも)、

谷垣内 鮎乃さんの

・ 어명이라며 사극에 빠진 남편이 일을 시키네.

(王命だと言いながら歴史ドラマにはまった夫がいろいろ命令する)

この二つの作品は笑いを誘う作品で、伊藤さんは接統詞を選ぶときの迷いを、また、谷垣内さんは韓国の歴史ドラマにはまっているご主人のことを面白おかしく書いてくれました。

また、明ハルさんの

・ 문화재 탐방, 북청 사자놀이에 지화자 좋~다.

(文化財探訪、北青獅子遊びにチファジャチャョタ)

濱脇真優菜さんの

・ 한국 식당의 화려한 오첩반상 군침 주르륵.

(韓国食堂の豪華な食事によだれがじゅるり)

この二つの作品は韓国の文化にさらに一歩踏み込んだ内容だったと思います。

また、「入選」でも 12 作品が選ばれました。他に受賞できなかった作品の中にも立派な作品が多くありました。

残念ながら今回入賞できなかった方も、懲りずにまた、来年の大会に奮ってご応募ください。화이팅!

< 作品の日本語訳はいずれも評者による >



受賞作品



最優秀賞 言葉の宝探し

山口 穂香〔玉川聖学院高等部〕

新型コロナウイルスが流行し、自粛期間が始まった4年前。中学生だった私は、独学で韓国語の勉強を始めた。好きな韓国アイドルと話してみたい、その一心だった。それだけだったはずなのに、4年に渡るこの学びは、私にとって”言葉の宝探し”となっていた。

ある日、韓国ドラマを見ていた私は、韓国語には日本語にはない言い回しが沢山あると気づいた。画面の邪魔にならないように意識された字幕と、耳から聞こえてくる韓国語の表現は少し違っている。

例えば、사랑 받다は、「愛される」と訳されていたが、日本語に直訳するとこれは「愛を受ける、愛をもらう」となる。韓国語だと、日本語の単なる受け身表現では見えてこない、愛してくれる人の存在がよりはっきりと見えてくる。

また、아프지마는「苦しなないで、お大事に」と訳されていたが、日本語に直訳すると「痛くならないで」となる。韓国語だと、なんだか、相手を労わる気持ちや心配する気持ちがよりストレートに伝わってくるようだ。

私が感じたこの表現の違いは、当たり前に使っていた日本語のより深い中身を教えてくれた。韓国語を学んでいなかったら気づけなかったことだ。

去年の春のこと。私は、通っている高校が締結している姉妹校への“韓国ホームステイプログラム”に参加し、初めて韓国を訪れた。正直、期待よりも不安が大きかった。韓国語の勉強はしていたものの、これまで韓国語で誰かと会話をしたことがなかったため、本当に伝わるのか怖かった。もしかしたら、未熟な発音を笑われてしまうかもなと思ったりもした。だが、いざ友達に会って話してみると、全くそんなことはなく、むしろ懸命に耳を傾けてくれた。本当に、韓国人の言葉はストレートで温かい。「할 수 있어」「네가 하고 싶은 데로 하면 돼」、日本だとあまりストレートに言えないこの言葉たちを何回聴いただろうか。ホームステイ中、ニュアンスの違う表現に、「韓国語のその表現やっぱり素敵だな…」と、何度言葉の奥深さを実感しただろうか…。

4年前、日本語の世界からたった一歩踏み出した私は、これまで数えきれない発見をした。こんなにも自分が”言葉”と向き合うとは思ひもなかった。韓国語を話す・聞くことは決して簡単ではない。けれど、言葉の深みを知ることが、辛い時に私を支える言葉にも深みを与えてくれた。韓国語特有の表現に、何度救われ、学ばされたことだろう。韓国語を学んでいる私は、“言葉の宝探し”をしているみたい。宝の発見は本当に嬉しくて、感動する。だから私は、韓国語に宝が溢れている限り、これからも学びを止めはしない。いつかこの集めた宝で、誰かの心を救うことができるように。



優秀賞 私が願う韓日の未来

金本 姫奈〔湘南白百合学園高等学校〕

2007年1月、在日韓国人3世の父と、父との結婚を機に日本に来た韓国人の母との間に私は生まれた。家では基本日本語だけが飛び交い、自分が韓国人であることを実感するのは、長期休みにソウルにある母の実家に帰省する時ぐらいだった。

そんな私が小学校4年生の頃、K-POPを好きになった。「テレビに映るあの人も、私と同じ国の人なんだ。」と思うと、韓国人である自分が少し嬉しくて、その頃から常に頭の片隅に「自分は韓国人である」と言うアイデンティティが生まれたと思う。

その頃は、友達に韓国人であることを隠したりすることなく、むしろ少し自慢げに話していたことを覚えている。

しかし、中学校に入り自分のアイデンティティに違和感を感じ始めた。新しくできた友達の家に行き、その友達の家でK-POPの話をしていた時、そこにいた友達の妹が「私韓国人嫌いなんだよね。」と発言した。

彼女は私が韓国人であることを知らずに発言していたが、それを聞いた私は大きなショックを受けた。ちょうどその頃スマホを手に入れ、インターネットやSNSを頻繁に使うようになった。ネットニュースで韓日関係の記事を読むと、どの記事にも必ず韓国を嫌ったり否定するコメントがついていた。SNSにも韓国について否定的な発言が多くあり、見るたびに心が痛くなった。

この頃から韓国や韓国人であることをよく思わない人が世の中にいることを知り、相手にどう思われるかが怖くなり、新しく知り合った人にはなるべく韓国人であることを隠すようになった。

しかし、最近、そんな私の考えを変える出来事があった。ある日SNSを見ていると、私の弟のアカウントが出てきた。弟はそのアカウントを自らの韓国名で登録していた。韓国人であることを隠してきた私には理解することができず、なぜ韓国名で登録しているのか聞くと、「僕は韓国人であることを誇りに思っているからね。」と言われた。

弟の言葉を聞いて、私は自分のアイデンティティについてもう一度よく考えてみた。なぜ韓国人である私が韓国人であることを公表するのに後ろめたさを感じなきゃいけないのか、もう少し自分が韓国人であることを堂々としてみようと思った。

友達の妹の発言も、ネット上で韓国を悪く言う人たちの発言も、根本を辿ると、韓日の間にあった歴史上の問題や、現在の決して良いとは言えない韓日関係にあると思う。まだ韓日の間には解決すべき問題が多いのが現実だが、和解が進み、韓国人も日本人もお互いに差別や偏見がなくなり、私のような悩みを抱えている人も、韓国人であることを堂々としていられる社会になることを願う。



優秀賞

国境を渡って気が付いたこと

石田 あかり〔東洋大学京北中学校〕

「天気がいいと、ここから韓国が見えるんだよ」と長い水平線を指差しながら対馬の人は言った。東京に住む私は今まで国境や隣国を意識したことがなかった。

国境の対馬は、直線距離でも九州は 120km、韓国は約 50km 離れており、韓国の方が距離が近い。だから昔から日本と韓国の仲介者だった。私がこの島に興味を持った理由は、日本に韓流ブームが来ているが、日本と韓国は歴史的にあまり仲が良いイメージがなかったのでその関係が気になったからだ。思い立ったら即行動、私は対馬と釜山に行くプログラムに参加した。

まず、対馬に向かった。対馬に着いて気付いたのは、対馬は日本であるはずなのに、ドラッグストアや公共施設の、看板や説明書きのところで日本語より大きく韓国語が書いてあったことだ。対馬は日本人よりもむしろ韓国人が経済を回しているのだなと思った。また、対馬では朝鮮通信使行列のイベントに参加することができた。朝鮮通信使行列とは、室町時代に始まった朝鮮国王が日本に送った使節のことで、国書を届けたり文化を伝えたりする役割がある。私はこのイベントで韓国の装束に身を包んで通信使の歩んだ道を辿ることで、朝鮮と日本の交流の歴史を学ぶことができた。

対馬から船で釜山に渡った。釜山は思ったよりも日本人にフレンドリーで、案内してくれた釜山外国語大学の高校生ともすぐに仲良くなることができた。公園で私達が日本語で話していると、会話が気になったのか中年の韓国男性が流暢な日本語で会話に混ざってきて、会話を盛り上げてくれた。私は日本人は韓国では嫌われていると思い込んでいたので、この事にとても驚いた。また、釜山滞在中にパスポートを無くすという大きなトラブルがあったが、警察署の方々は落ち込む私に大変親身に、そして温かく接して下さった。

私は行く前、韓国にいいイメージを抱いておらず、正直韓国に行くのが怖かったが、いざ行ってみると心温かい人ばかりで、印象ががらりと変わった。現地では対話することで案外、簡単に打ち解けることができたと思った。多分、日本の記事やニュースは韓国のいいところを上げる機会が少ないので、あまりよくないイメージの人が多いのかなとも考えた。私はこれから韓国に足を運び、いろんな人と直接話していこうと思う。行く前の先入観や、行った先で色々な出来事に見舞われたとしても、一歩踏み出してみることが大切なんだと感じた。



佳作

日韓の架け橋に

石倉 紗英〔高崎健康福祉大学高崎高等学校〕

「将来は韓国に住みたい」

こう言った私に小学校のときの先生は言った。

「やめておきなさい」

私には先生の言葉が衝撃だった。私は韓国ドラマを見るのが好きで毎日欠かさず色々なドラマを見ていた。そのことがきっかけでいつか韓国に行ってみたいと思うようになった。戸惑った私は先生に理由を聞いてみたら先生は詳しく説明してくれた。当時はよくわからなくて悩んだが今になってようやく分かるようになった。

日本と韓国には「日韓問題」と呼ばれる歴史的な問題があったのだ。日韓問題には「竹島領土問題」「徴用工訴訟問題」「慰安婦問題」などがある。中でも有名なのが竹島問題で実際に私も社会の授業の中でこの言葉を何度か聞いたことがあった。若者にとっては昔の問題なので馴染みがなくこの問題の深刻さを理解するのが難しいが、日韓の関係が良くなかった時代に生きていた人たちからしたら先生のように感じる人がいてもおかしくない。どうにかして先生に韓国の良さを知ってもらえないか。私は悩んだ末あることを考えた。先生におすすめの韓国ドラマを紹介しよう。当時の私は毎日先生のところに行って自分が見た韓国ドラマの感想を言いこいて先生にみてもらうのに必死だった。先生はそんな私に付き合ってくれた。いつしか先生の方から話してくれるようになっていた。ある時先生は私に言った「韓国にこんな良い文化があるのは知らなかったは。韓国に住むのありなんじゃない。」

とても嬉しかった。それと同時に韓国ドラマにはどの世代の人も楽しむことのできる力があることを知ることができた。

最近、近所の駅で竹島問題に関するデモが行われているのをみた。この光景を見たとき私は先生のことを思い出した。きっとこの人たちは先生と同じで韓国の良さを知らないだけなのだ。これは私たち若者が日韓問題に詳しくないのと同じだ。私たち日本人は世代に関係なく歴史上どんな問題があったのかまた、そのさきどうすれば韓国を好きになれるかを考える必要があるのかもしれない。そのきっかけとなるのが国がそれぞれにもつ文化を体感してみることだと思う。その中のひとつとしてあるのが韓国ドラマだ。文化を体感することでその国の知らない良い一面や以外な一面が見えてくるかもしれない。私は日本、韓国両者のもつ素晴らしい文化こそが日韓の架け橋になるかもしれないと思う。



佳作

釜山で見つけた私の夢

藤井 妃菜美〔長野県長野西高等学校〕

2024年3月28日、釜山での旅行が私の人生に大きな変化をもたらすことになるとは思わなかった。

母と2人で参加した甘川文化村・国際市場ツアー。私たちは唯一の参加者として、ツアーガイドのパクさんと出会った。パクさんは甘川文化村の歴史をわかりやすく説明してくれ、朝鮮戦争の難民によってつくられた背景や美しい景観に至るまでの過程を知った。村の中にある博物館では朝鮮戦争直後の貧しい難民生活の様子や当時の生活用品が展示され、甘川文化村についてより深く理解することができた。また、屋根の上に人間の顔をした鳥のオブジェがあることに興味を持ち、パクさんに尋ねると、「人がたまには全てを忘れて自由に空を飛びたいという願いを表現している」と教えてくれた。他にも村を一望できる展望台や写真スポットを案内してくれ、その経験は心に残る思い出となった。

国際市場に到着すると、現地の人々に賑わい、まるで韓国ドラマの世界に入り込んだかのような雰囲気を楽しむことができた。1200ものお店が並び、迷路のような路地が多く、人々が行き交う活気ある市場の魅力を感じた。そしてパクさんから、国際市場は朝鮮戦争の難民が生計を立てるために商売を始めて形成されたということを教えてもらった。このツアーで38度線の戦闘地域から逃れた難民の苦労や戦争の痛みに触れ、観光目的だけで訪れていた私にとって、その背後にある物語が衝撃的だった。また、歴史や文化を熱心に語ってくれたパクさんの姿勢が強く印象に残った。

この旅行を通じて、夢を見つけた。それは、パクさんのように一人ひとり丁寧に接し、心を込めて韓国を案内するツアーガイドになることだ。友達が進路を明確にしていく中、やりたいことがなく進路に迷っていたが、この旅行で韓国の歴史や文化への理解が深まり、将来的にもっと学びを深めたいと思うようになった。パクさんとの出会いが私の未来を明るくさせ、現在は韓国の歴史や文化を学べる大学に進学するために勉強している。この旅行は私にとって特別な意味を持ち、人生に大きな影響を与えた。将来、ツアーガイドとして成長した時には、パクさんに感謝の気持ちを伝え、訪れる人々に感動を与える存在になりたい。



佳作

순우리말に惹かれた私

八木 ころろ〔城西大学附属城西高等学校〕

ある日、いつものように聴いていた好きなKPOPアイドルの1曲に心惹かれ、とても興味を持ちました。気づけば、その曲のタイトルと歌詞の意味を夢中になって調べ、タイトルが「윤슬 (ユンスル)」であることを知りました。윤슬 (ユンスル)とは「太陽や月の光が水面に反射しキラキラ輝いている波」という意味でした。そして、同時に「순우리말 (スンウリマル)」という言葉を知り、その単語の数々の意味の美しさに強く惹かれたのです。それまで、韓国語といえば、日常的に使われる標準語や有名な方言、KPOPやドラマで耳にする言葉にしか馴染みがありませんでした。しかし、この曲をきっかけに、韓国語の中でも特に순우리말に秘められた魅力に気づくこととなりました。

「순우리말 (スンウリマル)」とは、「純韓国語」という意味で、外来語や漢字語を含まない、純粋な韓国語のことを指します。また、この言葉は朝鮮半島で特に古代から受け継がれてきた韓国語固有の単語や表現です。순우리말の持つ独特の音韻とリズム、そしてそれが表す意味の美しさや豊かさは、他の言語にはない魅力を持っています。

例として、先に述べた윤슬の他にも、「눈부시다 (ヌンプシダ)」という言葉があります。この言葉は「眩しい」という意味を持っていますが、単に光が強いというだけではなく、その光に対する感嘆や美しさを感じる心情が含まれています。また「꽃구름 (ッコックルム)」という言葉は「色々な色の光をまとっている雲」を表現するときに使われる言葉です。「꽃 (ッコッ)」は花、「구름 (クルム)」は雲を表現する単語で、韓国では「花」は植物だけではなく美しいものにつけることがあり、夕日などが反射して綺麗に色づいている雲のことを「꽃구름」と言います。순우리말には、このように感情や状況を細やかに表現する力があります。また、日本にも「木漏れ日」のように、説明的に訳することはできても、直訳することが難しい単語があります。そんな直訳することが容易ではない、その国独自の表現であるのが순우리말の良さであり、魅力です。

私はこの순우리말に出会って、KPOPやドラマで見たり、聞いたりしていた韓国の何気ない日常での景色や心情を言葉にする美しさに感動しました。日常に溢れている空間や概念をその言葉でなければ表せないような響きの美しさはより韓国語に奥深さを与えてくれます。私はこれからもっと韓国語を学んで多くの순우리말を知ってその単語の美しさやリズム、込められた感情を感じ取れるようになりたいと思いました。



佳作

私たちが築き上げる日韓関係

山内 千鶴〔実践女子学園高等学校〕

過去の歴史を変えることはできないが、現在、そして未来をより良いものに変えることはできる。私は常々、そう思っている。

私は、韓国人の母と日本人の父の間で生まれ育った。幼いころから東京とソウル、2つの都市で暮らす経験に恵まれ、母の影響で韓国という国をとて身近に感じていた。母がよく作ってくれるスンドゥブチゲやわかめスープなどの韓国料理は私の好物で、いつも美味しく食べている。また、母の実家に渡韓した際には、祖父母や従妹たちが温かく私たちを迎えてくれて、一緒に食事を楽しんだり、外出を楽しんだりしている。

しかし、そんな当たり前のように韓国の文化や人と関わっていた私にとって胸が痛むような出来事がよくあった。「私がK-pop アイドルを応援しているとお父さんが、“韓国は反日だから応援しないほうがいい” って言ってきたんだよね」という私が中学生のころにクラスメイトから向けられた、日韓の歴史問題を根本とした差別的な言葉。そして、韓国への偏見を持つ人々のインターネットへの攻撃的な書き込みや、在日コリアンの人たちに投げかけられるヘイトスピーチという名の鋭いナイフ。こんな事を目の当たりにしていくうちに、複雑な思いを強くすると同時に、自分のアイデンティティを人に言うことに抵抗感を抱く時もあった。

国同士の政治や歴史関係の善し悪しは、我々がどうこう軽く口にはいけないと思うし、まだまだ自分も研究が足りない。だが、私たち若者が、過去の歴史に対する無知から脱却し、「他者理解」をわきまえながら、現在、そして未来の日韓関係を良い方向に築き上げることはできるのではないだろうか。

最近では、K-pop や韓流ドラマにハマり、韓国語の勉強に励んでいる私の友達も数多くいる。このような韓流ブーム再来の影響により、韓国旅行に行く日本人も多く見受けられる。また、同様にJ-pop に魅了される韓国の若者が増えたりと、両国の人々の中で互いの国の文化に心をつかまれている。

文化の側面から若者をはじめとする人々によって、少しずつ解消されているように感じる日韓関係。これによって私は、大好きな日本と韓国、両方にアイデンティティを持つことに改めて誇りを感じるようになった。大事なものは、過去の出来事を知ること。そして、国籍によらず、一人の「人間として」お互いに尊重し合い、共存することである。



最優秀賞

ビューティフル・ネーム

薛 禮子〔兵庫教育大学〕

「どこまで言ったらいい…」私は、初めての場所や、人と出会う時には、いつもこの状況に陥り、懊悩している。このエッセイの題目は、鷺沢萌さん(1968～2004)の著書のタイトルを引用している。この作者との出会いは、恩師から紹介であり、私自身も社会人になってから教師を目指し始めた。そして現在は、大学院に在籍している。これまでの私自身は、公教育、医療機関で勤めていて、通称名を用いていた。私の通称名は、「礼子」だ。亡くなった父が、「礼儀正しい子どもに育ってほしい」という願いを込めてつけたと聞いている。本籍の名(禮子)に触れることは、役所のみであった。未だに私自身の出自を知らない友人も多数いる。私の知る限りでは、これまでに卒業した学校に、外国籍の児童や生徒が、学年に5名いなかった。家庭では、にんにくが必需品であった。毎年冬には、キムチを漬け、親しい人へ配っていた。また、週に1回程度、母が本国の家族と韓国語で話をしていたり、比較的に韓国の暮らしを肌で感じていた。小学生だった頃の私は、自分自身のことを肯定的に捉えていたため、韓国籍であることを伝えていた。しかし、「ちょーせんじん」などと、何度も国籍のことで痛烈な経験をするようになった。そして、未だにその当時の状況を鮮明に思い出すことができる。振り返ってみると、当時の私は、感じたことや、思ったことを言葉にして、周りの人々を傷つけて来た。過去の経験から分かったことは、「人は鏡である」ということと、辛かった体験は、ずっと残るということである。大人になればなるほど、二度と過去の体験を繰り返さないように、なるべく人と深くかかわることを避けてきた。そして、自分の理想である「普通のわたし」を求めてきた。でも、どこにいても、その「わたし」は存在しなかった。

著書の中では、私自身が30年間抱えていた想いを、彼女の言葉で代弁されている。最も心に残っている一文は「自己紹介という行為が自らに強い苦痛の感覚だけは、鮮明に憶えている。(p.14)」の部分であり、青いマーカーラインが引かれている。未だに私も、自己紹介への心労が絶えない。しかし、彼女のように2つの名前を大切にしたいと思ったきっかけは、私自身を肯定的に捉えてくださった高校時代の恩師の影響である。その先生は、「書く」ことに対して、常に具体性を追求していた。私の言葉で、私の考えたことが具体的になるまで、諦めないでいてくれた。進学願書を作成するにあたって、自分の生きてきた体験を言語化できるように添削していただいた。その願書は、12年経った今でも大切に保管してあり、挫折そうな時に読み返すようにしている。今後も、自分との闘いは絶えないだろうが、国籍を超え、私の名前を呼んでくれる人とのつながりを大切にしながら、前を向いていきたい。



優秀賞

1つの詩がつなぐ2つの国の言葉と心

富沢 より子〔東京都〕

酒注ぐ音は とくとかとく たが／カリタ カリタ と聴こえる国もあって／波の音は どぶん ざ ざ ざァ なのに／
チャルサー チャルサー と聴こえる国もある…

私の住む西東京市ゆかりの詩人茨木のり子さんの「波の音」に出会ったとき、「これは日本と韓国をつなぐ詩だ」と直感しました。茨木のり子を顕彰する市民活動の合唱隊に属している私はこの詩に曲をつけてみんなで歌いたいと思いました。できたらハングルの訳詩もつけて、2つの言葉で歌い、韓国の方にも聴いてもらいたい…さっそく作曲に取り組み、韓国の民謡を思わせるメロディができました。ハングル訳詩は、歌の仲間のお知り合いの韓国の方をお願いして、すてきな詩を作っていただきました。さあ、これを歌おう、というところで、私は立ち止まりました。

「このハングルにカタカナのルビを振って済ませるのか？」そんな安直なことでは、訳詩を作ってくださった方にも失礼だし、口先だけの歌だったら韓国の方たちの心に届くはずありません。そんなことでよいのか…？

一念発起した私は、ラジオ講座でハングルを学び始めました。まったくのゼロからのスタートで、反切表から1字1字拾って解読し、たった3行の会話フレーズを理解するのに半日かかり…さすがに音をあげそうになりました。でも決して諦めませんでした。これまで応援してくださった日本の、そして韓国の友人を指折り数え「何としてもこの曲を納得のいく形で世に出さなければ」と必死で取り組みました。奮闘努力するうち、いつか勉強が苦にならなくなっていました。さらに文学や詩、K-POP や料理へと興味も広がりました。

茨木のり子さんは、夫の没後50歳からハングルを学び始め、金裕鴻先生のもとで研鑽を積み、翻訳詩集『韓国現代詩選』を刊行されるまでになりました。勉強のきっかけは、ある韓国の詩人に「日本語がお上手ですね」と話しかけたら「子どもの頃に学校で習わされましたもの」。その答えに、自分の無神経さを恥じた経験だそうです。「今度は私がハングルを学ぶ番だわ」。以来、熱心に学び、韓国の友人もでき、誠心誠意関わり続けました。

そんな茨木のり子さんと並んで、私の学びの志を持続させてくれる人たちに、柳宗悦、そして浅川伯教・巧兄弟があります。今年開館100周年を迎える朝鮮民族美術館を日本統治下のソウル・景福宮に開設したこの3人は、朝鮮の民衆の日常使いの品々に普遍的な美を見出し、それらを生み出した人々を心から愛し尊敬しました。彼らは、国と国とをつなぐのは政治や経済ではなく、文化や芸術による交流なのだとことを示してくれました。その心を受け継ぎ、真の尊敬と友情に基づく関係を築いていきたいと思います。この『波の音』を通じて韓国の方たちと心からの交流ができれば幸いです。

優秀賞

韓国のウリ文化と熱い情

太田 久琳〔東京都〕

ある日、道で転んだ人がいた。ちらっと一瞥する者。首を傾げて不安そうに見る者。

でも手を差し伸べる人は誰もいなかった。

私もその一人。みんな冷たいなって思いながら、そんな自分も助けられなかった。

先日ネットで、電車内で倒れた男性を周囲の客が協力して応急措置を行ったという韓国のニュースを目にした。周囲の客の多くが、一目散に慌てて男性に駆け寄り様子が印象的だった。もしこれが日本だったら、もし自分の目の前で起こったらと思った。

目の前で困っている赤の他人を、ためらいもなく助けることができる人が日本でどれだけいるだろうか。

韓国には“ウリ文化”という特徴的な文化がある。

日本では「私の」と表現するところを韓国では「私たちの」と表す。

日本では「私の家族」で「私の国」。しかし、韓国では「私たちの家族」で「私たちの国」。

少し大げさだと思っていたが、実際にその“ウリ”の中に属してみたら案外悪くないものだった。

留学中、韓国語もままならない私のことを「우리 쿠린아 (ウリ クリナ)」と韓国の友人が表現してくれた時、何にも代えがたい嬉しい感情になった。

今まで外野にいた自分が、国籍も文化も違う韓国の仲間になった感じがした。韓国のみんなどの距離がぐっと近くなったのだ。

“ウリ”の中に入ったら、韓国ではお互い様になる。ご飯だって「私たち」でシェアするし、日常の中の出来事や情報もよく共有する。“ウリ”の中の誰かが困っていたら助けるし、自分が困ったときはきっと周りも沢山協力してくれる。

電車のニュースも、この“ウリ文化”が根底にあるからこそ、困っている人に迷わず手を差し伸べる“情”を感じた。だから自分は“ウリ文化”が大好きで、“ウリ”に対する韓国人の“熱い情”をリスペクトしている。しかし日本に帰ってから、私の中の“ウリ文化”はいつの間にかどこかに消えてしまったようだ。

日本では自分以外の人とは一定の距離をとる。それは心地よいが、どこか寂しい。

もし日本でも韓国のように、周りの人が「私たちの国にいる同じ仲間だ」という意識があれば、切符売り場で困っている外国人や重い荷物を持って階段を上っているお年寄りをためらいもなく助けることができるだろうか。

自分にはまだそんな勇気がない。「私たちの仲間だ」という“熱い情”がどうしても湧き出て来ない。今でも“ウリ文化”に憧れて、自分もその中に入りたくて、でもできない歯がゆさ。食事のときには、食べ物をシェアして“ウリ文化”を装ってみる。しかし、いざ全く知らない人が目の前で困っていたら“ウリ文化”なんて頭の中から吹き飛んで知らないフリしかできない自分が悔しい。いつか自分も韓国人みたいに周りの人まで包み込めるような“ウリ文化”を身体に染み込ませて、「私たち、仲間なんだから助けるのは当然でしょ」と困っている仲間にはためらいもなく手を差し伸べられるような“情”の溢れる人間になりたい。

佳作

全州と清州、そして、ちょっとした違い

中村 幸子〔神奈川県〕

私が韓国語を習いソウルや釜山にも行って、他の町にも一人で行ってみたいとなった頃のことです。ピビンバで有名な全州に一人旅することにしました。私は金浦空港のバス乗り場で、運転手さんにガイドブックの全州のページを見せて「このバスは全州に行きますか？」と聞きました。運転手さんはチラッと見て「ネー」と答えました。私は席に着き、バスが発車しました。

しばらくして、私はフロントガラスの行き先のハングル文字を読み、違和感を感じました。ドキドキしながら、前の席の男性に「このバスは全州に行きますか？」と聞きました。振り向いた男性は「全州？清州？」と聞き返します。慌てた私は、別な人にも尋ねました。すると「あなたの発音は違う。全州はチョンジュ、清州はチョォーンジュ」。周囲の人も私に発音練習をさせようとしします。それどころではなくって、運転手さんに「間違えました！降ろしてください」と頼みました。でも運転手さんから「清州まで行くしかないよ。そこで乗りかえなさい」と言われてしまいました。バスの中では「あ～あ、間違えたんだ」という声が聞こえてきます。私は清州がどこなのかも知らず、不安な気持ちでいっぱいでした。数時間後、やっと清州に着き、全州行きのバスに乗りかえて、窓の外を眺めていました。そろそろ出発という時間になり、誰かの声が聞こえます。「日本人の女性は、このバスに乗ってる？」さっきのバスの運転手さんが中をのぞき込んでいます。私は嬉しくなって「おじさん！私はここにいます」と手を振りました。運転手さんはニコリして去って行きました。あの運転手さんは私のことを心配してくれていたんだと思うと、一人でない気がして心が温くなりました。

この話には続きがあります。私は、広報向けの文章上達の研修会に通っていて、この事について文章を書いたことがあります。講師の方は、事前に作品を選んで受講者に配るのですが、私の文章が選ばれました。私は褒められるのだと思って期待しました。

ところが、講師の先生は厳しい顔で「この作品はやり過ぎましたね。読み手にサービスしたくなって、つい良い話を作ってしまうことがあります」と言いました。私は頭が混乱しました。しばらくして理解したのは、運転手さんがやってくる事はありえないから、私が話を作ったと思われたという事です。とっさに大きな声で「本当なんです」と言えば良かったのですが、大勢の人がいる会場で声を出す勇気が無く、タイミングを失い、諦めてしまいました。

この時の事は今でも思い出します。なぜ先生は作り話だと思ったのでしょうか。たぶん、韓国の人とあまり話したことがない人だったのではないのでしょうか。韓国では、人間の距離感が日本とは微妙に違います。日本人のように距離を取ることがなく、とても近いです。あの講師の方が韓国旅行をしたら分かるんだけどなあと今でも思っています。



佳作

하나, 一つ, 花

松崎 花菜〔帝塚山学院大学〕

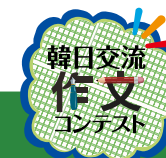
長い間の犬猿の仲でありながら、善意の競争で互いの実力を競ってきた日韓サッカー。その過程には燃える競争もあれば、ドラマチックな深い感動もあっただろう。2002年、日本と韓国で第17回ワールドカップが開催された。ワールドカップ史上初めて両国が一つの大会を共同開催することになったのだ。同大会は優勝候補の強豪が次々と敗れる波乱万丈の大会としても有名だ。

日本の初の16強進出と韓国代表チームの4強進出はアジア初だった。日本と韓国は相互に協力し、大会を成功に導いた。このような和合の後、選手たちは言うまでもなく、両国のサッカー界とファンの熾烈な競争が続いていた。日韓戦というと、国の名誉をかけた大会だけでなく、親善試合ですらライバル意識に燃える。両国の縁は隣国でありながら同じ東アジア圏国家という点だが、これにより過去のわたかまりを作った。しかし、私が籍を置いている女子サッカーでは両国クラブ間の選手の相互移籍であったり、育成年代の交流や合同トレーニングであったりと相互理解と友好関係も深められている。

昨年2月、私は高麗大学校の女子サッカー部と交流する機会を持った。中学生の時に数回韓国と国際試合をした経験はあったが、その時はあくまでも勝たなければならぬ相手チームに過ぎなかった。今回は試合前に交流会があったが、試合でしか交流がなかったせいか、韓国人選手に対するイメージは強いお姉さんという印象だった。しかし、実際に接してみると想像していたのとは180度違った。韓国の選手はよく笑い、明るく、言葉が通じなくても韓国語、日本語、英語、身振り手振りで積極的にコミュニケーションを図ってくれた。(もちろん試合の時は列外だったが)

その結果、人生初の韓国友人ができた。交流が終わった後もその友達と連絡を取り続け、韓国語と日本語に対する関心を共有し、韓国で流行する言葉や文化を話した。韓国語で私の気持ちを伝えることができれば、もっと親しくなれると思って勉強にもっと熱が入る。これからは試合ではなく、互いの国を訪問して新しい経験を積むことが私たちのパケットリストだ。2002年韓日ワールドカップのちょうど20年後の2022年に得た日韓サッカーを通じた貴重な友人。20年後、私たちがどのような人物になっているか、今から楽しみだ。もしかしたら、サッカーで両国を一つにする知韓派、知日派の監督になっているかも……。

互いを尊重できる日韓のサッカーを하나にまとめ、サッカーの歴史に残る「花」を咲かせたいのが将来の夢でもある。これが私のできる韓日交流の始まりであり、究極の目標でもある。必ず実現させたいし、できると信じている。なぜなら、私の名前にはすでにハングル読みとして「하나 (一つ)」と漢字の「花」が入っているからだ。



佳作

お義母さんの水キムチ

水口 さか〔神奈川県〕

「白菜と大根！あと野菜はなんでも！りんごを入れるなら少しね！多すぎるとバランスが崩れるから！お酢は入れないよ！」

お義母さんが言ったことを私は必死にメモをしていた。

十二月。第三子の出産に伴って、お義母さんが韓国から一ヶ月ほど手伝いに来てくれた。

まだ幼い長男と長女はビデオ通話で何度も話したことがあるハルモニに初めて会えて興奮している様子だった。

お義母さんは「これだったら辛いからきつと子供達も食べられるだろう。」と言って、私達に水キムチを作ってくれることになった。

慣れない台所で、黙々と野菜を刻んでいく。

発酵を待つ間、子供達は物珍しきようにお義母さんが買ってきてくれたすごく大きなタッパーを2つ覗き込んだ。野菜がぶかぶかと浮かぶ様子が面白いようだ。

三日目の朝、お義母さんが味見をして、「そろそろいいかな。」のひと声に、初めて水キムチを食べる私は子供たちと一緒にわくわくが止まらなくなっていた。

しかし一番心待ちにしていたのはきっと韓国人の夫であろう。

料理上手な母のキムチを友達の家まで食べに来て、炊飯器の中のご飯が空っぽになった話は夫のよくする話であるし、遠い目をして「久しぶりに母の料理が食べたいなあ」と呟く夫を見てきた。

母の手料理というのは、母が子を想う大きな愛情と真心が込められている。手の味とも言われるが、それはそう簡単に再現できないだろう。

食卓に他の料理と一緒に並べられた水キムチ。

みんなはじめに手を取って食べ始めた。

白菜、大根、人参、りんご…

冬の凜とした空気の中で、ひんやり冷えた水キムチがシャキッと私の身をも引き締めてくれるようだった。

野菜や果物そのものの甘みが優しく、漬け汁をゴクリと飲んでみるとまろやかな酸味がスーッと口に広がり、なんて美味しいこと。

日が経つにつれ、また味が変化していくのかと思うとそれもまた楽しみだ。

子どもたちも「ハルモニ、マシッソヨ〜！」と拙い韓国語で話し、お義母さんは目を細めて温かな笑顔で笑った。

八月。次女は元気よくずり這いをして部屋を駆け巡っている。

一方、お義母さんは膝を悪くして入院しているそうだ。すぐにでも韓国に駆け付けたいのだが、なかなか都合が合わずにいる。

私はお義母さんの事を考えながら、ふと冬に食べた水キムチのことを思い出した。

やや白濁とした漬け汁に浮かぶ、色とりどりの野菜や果物たち。想像するだけで、なんとも涼しげである。

ああ、こんなじつとりと汗ばむ夏の暑い日に、水キムチをガラスの器にたっぷりと盛って、冷えた漬け汁ごとゴクゴクと飲み干したい。

爽やかな甘酸っぱい漬け汁が乾いた喉を通っていくのを想像し、うっとりする。

戸棚の中で寂しそうにしている大きな二つのタッパーを見て、明日お義母さんに教わった水キムチを作ろうと心に決めたのだった。



佳作

韓国料理

高橋 柚香〔神奈川県〕

毎週日曜日、わたしたち夫婦はサムギョブサルを食べる。韓国人の夫と、日本人のわたし。生まれた国が違っても、育った文化が違っても、わたしたちは美味しいお肉を前にすると、素直になれる。優しくなれる。わたしたちの夫婦円満の秘訣、それはサムギョブサルだ。

わたしたちは2年前、国際結婚をした。異国の人と結婚すると、毎日新しい発見があったり、自分の知らない文化を目の当たりにすることになったり、一緒に暮らす日々が新鮮で面白い。しかし文化の違いによる考え方の差が、わたしたちを衝突させることも多い。お互いの価値観や行動に不満があってもすぐには言えず、後々大喧嘩に発展するのがよくある流れだ。

そんなわたしたちを繋ぐのは、忙しい日々を乗り越えた日曜日に楽しむ、サムギョブサル。

熱々に熱した鉄板の上に、脂の乗った新鮮な豚バラ肉と、酸味がクセになるキムチを乗せる。たちまち煙があがりリビングに広がるが、それさえも幸せに感じるほどに、美味しい匂いが充満する。肉を焼くのは夫の役目だ。軽々と tong で肉を持ち上げ、肉汁滴る肉をハサミで切る姿は、好きな夫の仕草ランキングで上位に食い込む。そして、良い塩梅に塩を振るのはわたしの役目。夫婦で協力してこそ、美味しいサムギョブサルを味わえる。

そんな夫婦の共同作業もいよいよ終盤へ。表面がカリッとするまでしっかり焼いた豚肉を、瑞々しいサンチュにそっと置く。焼いたことで旨みがぎゅっと凝縮されたキムチ、ピリッと辛い青唐辛子に、食欲をそそるニンニクも乗せて包み、大きな口でパクッと一口。その瞬間、口の中に幸せが広がる。目の前の夫も、肉を頬張りながら満面の笑みを浮かべる。文化の違いや価値観の違い、日頃の不満なんてどうでもいい。わたしはこの笑顔が好きなのだ。そう思える、日曜日の20時。

そんな幸せを口の中に噛み締めながら、わたしたちは色々なことを話し合う。あの時のあの言葉が傷ついたよ。ごめんね、わたしはこういう風に思うんだ。言ってくれてありがとう、これからはこうしようか。いつもは売り言葉に買い言葉で喧嘩になりがちな話も、力を合わせて焼いた美味しいサムギョブサルを食べれば、優しい気持ちで話し合える。許しあって、認め合える。

日本と韓国、異なる文化で育ってきたわたしたちが、結婚して新しい家庭を築くのは簡単ではないのかもしれない。だからこそ、サムギョブサルを食べながら素直な気持ちを話し合う、穏やかな日曜日の時間を大切にしたい。こうしてサムギョブサルを囲うごとに、わたしたちは家族になっていくのだから。



最優秀賞 한국관광

久保 直香〔山口県立山口高等学校〕

작년에도 나는 여행을 쓰려고 했다. 해 봤지만, 결국 나의 여행기는 완성되지 않았다. 그때는 아직 한국에 간 적이 없었기 때문이다. 하지만 나는 상상 속에서 한국을 자주 여행했다.

이는 나만의 폰 여행기다.

핸드폰 지도 앱을 열리면 나의 여행은 시작된다.

우선 위성지도로 하늘을 날아 본다. 오, 뭔가 알록달록한 곳을 찾았다! 전통 건축 같은데 화려하게 꾸며져 있다는 것이 신기했다. 탭해서 알아보면 그곳은 절이었다. 그리고 그 화려한 길은 연등이었다. 처음에는 한옥과 컬러풀한 데코레이션은 어울리지 않다고 느꼈지만, 생각해보니 역사 드라마에서도 알록달록한 한복과 행사가 나왔기에 한옥과 다양한 색은 잘 조화되는 것 같다. 사진만 봐도 아름답다. 그리고 그 절 안에는 카페도 있었다. 리뷰를 보면 음료가 맛있고 뷰가 좋다고 한다. 나무의 따뜻함이 느껴지는 그 곳에서 차를 마시면 마음이 편안해지겠다.

다음에는 대학교 캠퍼스로 날아가고 거리뷰로 내려본다. 산책도 해 본다. 대학생들은 정류장에서 여기를 걸어가는 걸까? 여기는 나무가 많아서 공부하기 좋겠다. 상상하면 꿈에 가슴이 부풀다.

하지만 그 폰 안의 한국은 늘 똑같은 몇년 전 사진이고 계속 멈춰 있다.

언젠가 실제로 한국을 느끼고 싶다.

드디어 한국에 왔다.

비행기에서 위성지도보다 선명한 한국을 보고 처음으로 한국 거리를 걸었을 때 감동에 눈물이 날 뻔했다. 문화 체험 시설에서는 착한 직원분들 덕분에 즐겁고 따뜻한 추억이 생겼다. SNS 로만 보던 네컷을 찍어 봤다. 처음으로 한국 손맛을 느꼈다. 카페가 많아서 놀랐고 여러가지 음료를 마셔 봤다. 서점에서 많은 한국어로 둘러싸여 기분 좋았다. 내가 좋아하는 일본 캐릭터를 한국에서도 많이 봐서 기뻐다. 캠퍼스 투어 때 대학생이 한국어 잘한다고 칭찬해주셔서 자신감이 생겼다.

더 한국에 있고 싶다. 아쉬움을 남기고 많은 추억을 가지고 나는 한국을 떠났다.

일본에 돌아와도 내 발로 걷던 길을 거리뷰로 따라 본다. 찍은 사진을 뒤돌아본다. 잠들기 전에 대학 캠퍼스를 떠올려 본다. 꿈에 그 풍경에서 웃고 있는 내가 나오기를, 그 꿈이 현실이 되기를 기원한다.

오늘도 내일도, 다시 한국에 갈 수 있는 그 날까지 나만의 여행은 계속된다.

여권도 긴 시간도 필요 없는 폰 여행, 여러분도 해 보는 것은 어떨까요? 언젠가 실제로 가서 오래오래 마음에 남는 좋은 추억이 생기를 바라며.



優秀賞 붉은 보석 ~ 마음속에 빛나고 ~

平田 大葵〔群馬県立中央中等教育学校・エムズ英会話〕

진하고, 진한 빨간색. “잘 먹겠습니다! 와, 이 김치는 맵지만 맛있다!! “

나는 한국요리를 좋아한다. 가족은 모두 일본사람이지만, 어머니가 한국을 좋아해서 자주 한국요리가 식탁을 물들이다. 그 중에서도 나에게 어머니가 만든 김치가 붉은 보석처럼 빛나게 보인다.

한국요리를 좋아한다고 친구에게 말하면 자주 “한국 요리 중에서 뭐가 제일 좋아?” 라고 질문을 받는다. “김치! 그 매운 맛만 아닌 맛을 좋아해!” 나는 마치 그 질문에 답을 알고 있었던 것처럼 대답한다. 단순한 인간이라고 생각할지도 모르지만 강한 생각이 있다. 그러면 계속해서 질문을 받는다. “매운것만 아닌맛은 뭐야?” 이 질문은 대답할 수 없었다. 답은 내 마음 속에 있을 텐데 그게 뭐가 나도 모르기 때문이다.

그런데, 김치에는 뭐가 들어 있는 것일까? 어머니가 만드는 김치에는 많은 것이 들어 있다. 고추, 마늘, 생강, 가다랑어 육수, 꿀, 사과, 우메보시 등등... 그리고 잊어서는 안 되는 것이 나를 생각해 주는 마음, 애정이다.

그런 김치를 시간을 들여 발효시키는 것으로 더 맛있어지는 것이다. 그 맛이 좋아서 어렸을 때 부터 자주 함께 만들었다. 야채를 자르는 소리, 섞는 소리가 선명한 색으로 마음속에 반짝 빛나고 있다.

어머니의 맛, 김치. 김치의 맛은 가정에 따라 다르다. 게다가 만들때 마다 매번 맛은 달라진다. 우리 어머니가 만드는 김치도 본고장의 것과 다르지만, 그 맛이 먹는 사람의 마음을 따뜻하게 한다. 먹으면 거기에 미소가 넘친다. 김치는 다채로운 식재료와 애정의 총합. 그 때 그 때 태어나는 맛과 애정의 소용돌이가 우리 오감과 마음을 둘러싸고 “김치의 맛” 이 태어나는 것이다. 김치는 우리 마음을 상냥하고, 따뜻하게 하고, 풍요롭게 해준다. 매운 것만이 아닌 맛은 이것이라는 것을 이제서야 깨달았다. 그리고 그 맛은 어머니와의 기억을 되살려 준다. 자주 함께 만든 추억을. 그 맛은 표현해 준다. 지금은 웬지 함께 만드는 것이 부끄러워서 못하지만...

나도 누군가의 어머니가 되고 싶다. 어머니가 만드는 김치가 내 마음을 따뜻하게 해 준 것처럼, 나도 누군가의 마음에 닿는 김치를 만들고 싶다. 자신은 없지만 할 수 있을 것 같다. 김치는 그런 음식이니까.

“잘 먹겠습니다! 와, 이 김치는 맵지만 좀 시고 달고 뭔가 그림다. 따뜻하고 부드러운 맛. 어머니가 만드는 김치만의 이 맛이 옛날에도 지금도 앞으로도 계속 계속 너무 좋다.



優秀賞

“재미없어 ? 냉장고엔 잼이 [재미] 있어 !”

稲垣 郁菜 [京都国際高等学校]

‘냉장고’ , 발음이 귀여운 한국어입니다. ‘냉장고’ 를 들으면 아재개그가 생각납니다. 요즘 아재개그에 빠져 선생님이나 친구한테 자꾸 개그를 칩니다. 친한 친구는 “재미없어”라고 반응해요. 그러면 저는 “잼이[재미] 없어? 그럼 냉장고 찾아봐! 잼이 있어.”라고 합니다. 아재개그를 할 수 있어 오히려 ‘재미없다’ 는 말이 듣고 싶어요. 캘리그라피로 제일 좋아하는 한국어를 쓰는 수업이 있었는데, 그때도 ‘세상에서 제일 행복한 바다는 ?, 사랑해.’ 라고 썼습니다. ‘사랑해’ 라는 말이 예쁘고, 아재개그에 딱 맞았으니까요.

중 2 때 한국어 공부를 시작했습니다. 자신감이 부족하고 다른 사람의 말에 쉽게 상처를 받던 시기였어요. 또, 어릴 때부터 부모님한테 들어온 날카로운 말과 거친 행동이 일반적이지 않다고 느껴 힘들었습니다. 현실도피의 방법으로 시작한 한국어 공부. 한글부터 익히는데, ‘뭘야! 너무 재밌잖아.’ 라고 느꼈습니다. 매일 30 개 단어를 외우고, 유튜브 영상으로 강의를 듣고, 인터넷 기사나 책을 읽었습니다. 그러다 보니 한국에 관심이 생겨 한국어, 문화, 역사까지 배울 수 있는 학교를 찾았고, 즐겁게 다니고 있습니다.

고교 입시 후, 한국대표팀 대 일본오릭스 야구를 처음 직관했고 ‘바람의 손자’ 이정후 선수를 좋아하게 되었습니다. 작년 TOPIK 시험 첫 도전 결과는 5 급! 정말 기뻐 스스로 대단한 사람이 된 것 같았습니다. 올해는 윤동주 시낭송대회에도 나갔는데, 상을 받지 못했지만 발음이 부족함을 깨달았습니다. 전주 성심여고 친구들이 학교를 방문했을 때, 인터뷰 통역을 맡았습니다. 통역 중, 답변 내용을 잊어 당황하기도 했지만 보람 있었습니다. 수업에서 아재개그를 조사해 발표한 적이 있습니다. 의무였던 과제가 즐거워졌습니다. 그리고 힘들 때마다 저를 구해준 글도 있습니다. ‘나는 당신이 있는 그대로의 모습을 사랑하며 매 순간 소중하게 살아가길 바란다.’ 「내가 사랑한 것 중에 왜 나만 없을까 (이종혁)」 라는 책의 문장입니다.

한국과 관련된 도전은 항상 새로워 제 세계를 넓혀 주었으며, 위로도 받았습니다. 도전은 용기가 필요하고, 실패도 좋은 추억이 된다는 것을 배웠습니다. 지금 목표는 더 많이 도전하고 한국어를 자신 있게 얘기하는 것입니다. 한국 대학에 가고 싶다는 꿈도 생겼습니다. 앞으로 더 잘 살 수 있다는 희망을 갖고 아재개그로 주변 사람을 웃기며, 잼이[재미] 있는 ‘나’ 를 달달하게 사랑하며 살겠습니다.



佳作

나는 미래의 한일 프로듀서

佐々木 夏妃 [滋賀県立国際情報高等学校]

다른 친구들이 기저귀를 떼고 마음껏 뛰어다닐 때쯤 전 한국이라는 새로움을 만나게 되었습니다. 케이팝을 좋아하는 어머니의 영향으로 제가 그 당시 들었던 음악은 일본의 동요가 아닌 케이팝이었습니다.

케이팝과 한국이 무엇인지도 모를 때부터 우리 집은 한국 스타일이었습니다. 그러다 저는 중학교 2 학년 사춘기의 절정에 이를 때쯤 트와이스를 알고 그 음악을 들으며 빠져버렸고, BTS 까지 저의 질풍노도의 시기는 케이팝과 함께 서막을 올리게 되었습니다.

물론 저도 민감한 시기라서 여느 중학생들과 마찬가지로 일본의 아이돌도 좋아하며 행복한 중학교 시절을 보냈습니다. 계속 아이돌을 보면서 한일 아이돌을 비교하게 됐고, 큰 차이점 2 개를 발견했습니다.

첫 번째는 바로 프로모션 전략입니다.

일본의 아이돌은 국내 중심 활동이지만 한국은 이미 해외시장을 공략하기 위한 준비가 되어 있었다는 점입니다. 이 차이는 비대면 코로나 19 와도 맞물려 있습니다. 한국 아이돌그룹은 팬들과 소통하기 위한 여러 창구를 만들기 시작해 저도 접근하기 쉬운 콘텐츠, 예를 들면 직캠, 팬 캠, 고정카메라, 셀카 등 일본에서는 보기 힘든 소통방식입니다. 코로나가 완화되고 일상을 회복하는 요즘은 팬 미팅을 통해 하이 파이프나 직접 가까운 거리에서 그 들을 만날 수 있게 되어 정말 기쁩니다. 그러나 일본의 아이돌은 직접 접할 수 있는 이벤트가 적어 기본적으로 라이브에서만 만날 수 있습니다.

두 번째는 일본의 아이돌은 성장형이고 한국의 아이돌은 이미 완성형이라는 점입니다. 일본은 데뷔하고 거기서부터 서서히 성장하며 팬들과 소통하는 반면, 한국의 아이돌은 완벽하게 실력을 갖춘 후에 무대를 즐기고 팬들과 즐거운 소통을 하고 있다고 느꼈습니다. 찾아본 결과 일본은 연습생 기간이 짧고 한국은 길다는 것을 알게 되었습니다.

일본 아이돌의 퍼포먼스는 국내에서 라이브로만 한정되지만, 만나지 못한 만큼 만났을 때의 감동은 정말 표현할 수 없을 정도로 기쁩니다. 케이팝 아이돌은 프라이빗한 사진을 블로그나 SNS 계정을 통해 친구같이 가깝게 느낄 수 있습니다. 가까운 거리의 일본과 한국이지만, 서로 비슷하면서도 다른 부분이 있어서 흥미로웠습니다.

지금 고등학교에서 한국어를 배운 지 3 개월. 아직은 아주 서툴지만, 열심히 공부해서 훗 속에서 진주를 발견할 수 있는 한일 간의 장점만을 살려서 모든 사람에게 희망을 주는 멋진 프로듀서로 활약해 보고 싶습니다.



佳作

내가 좋아하는 한국문화

坂東 優希菜〔大垣日本大学高等学校〕

“한국인은 비 오는 날에 부침개를 먹고 싶어진대요.”

어느 날 내가 티비를 보고 있다가 들렸던 말이다.

“부침개를 먹고 싶어진다고? 왜일까?” 나는 생각했다. 따뜻한 음식이라서? 아니, 식어도 맛있지. 그때 티비 방송에서 소개받은 이유는 빗방울이 바닥에 떨어지는 소리와 부침개를 부칠 때 나는 소리가 비슷하다는 것이었다. 생각해보면 비슷할지도…아마?

그래서 나는 인터넷으로 그 이유를 찾아보았다, 왜 한국인은 비가 오면 부침개가 생각날지. 찾아보다 보니까, 소리도 그 이유 중 하나였다. 비 소리와 부침개를 부치는 소리는 파형도 비슷하고 한다.

그리고 비 오는 날의 높은 습도도 상관이 있다고 한다. 습도가 높아지면 후각이 예민해지고 공기 중에 있는 냄새 분자가 콧속에 잘 달라붙는다. 그래서 부침개를 부치는 기름 냄새가 콧속에 오래 머무르기 때문에 부침개가 평소보다 더 맛있게 느껴진다고 한다. 전분이 가득한 밀가루 요리를 먹어서 높은 습도 때문에 생긴 스트레스를 풀 수 있는 것도 또한 이유다.

찾아봐서 내가 가장 납득한 이유는 바로 “문화” 다. 쉬운 말이지만 문화가 문화로써 성립되기 위해서는 오랜 시간이 필요하다. 아마 한국에서는 “비 오는 날엔 부침개 (랑 막걸리)” 라는 말이 오랜 동안 전달되고 지금이 있는 것 같다. 비 오는 날의 문화는 일본에서도 있지만 음식을 생각나는 감성은 거의 없다. 이런 감성은 옛날부터 건강을 위해서 식문화를 소중히 지켜왔던 한국 특유의 감성이라고 나는 생각한다.

내가 언젠가 한국에 여행으로 갔을 때, 만약에 비가 와도 나는 그 날을 여행자 중에서 제일 즐길 수 있는 자신이 있다. 내 목표는 “비 오는 날에 한국에서 부침개를 먹기” 가 되었다. 그리고 스무 살이 되면 막걸리도 같이 먹고 싶다. 비가 오고 어쩔 수 없는 우울함을 “식사” 로 해소하는 문화, 그게 바로 “내가 좋아하는 한국문화” 다.



佳作

한 장의 영수증

福島 実夏〔千葉県立松戸国際高等学校〕

저는 하라주쿠의 음식점에서 아르바이트를 하고 있습니다. 저희 가게에는 한국인 관광객들도 자주 오십니다. 사람들과 이야기하는 것을 좋아하는 저는 계산할 때 조금 시간이 있으면 공부 중인 한국어를 사용해서 한국인 손님과 대화하는 경우가 많습니다. 제가 좋아하는 한국에 대해 이야기를 들을 수 있는 그 시간이 저는 즐겁습니다. 정확하게 말하고 있는지 자신이 없지만 이야기를 조금 길게 할 수 있을 때는 정말 기쁩니다.

어느날 한국인 부부가 오셨습니다. 평소처럼 한국어로 주문을 받았습시다. 그러자 부부가 “가까운 곳에 추천할 만한 곳이 없나요?” 라고 질문을 하셔서 저는 근처의 신사와 자주 가는 일식집을 소개했습니다. 그러자 부부는 웃는 얼굴로 “가르쳐 줘서 고맙다. 가볼게. 그리고 한국어 너무 잘한다!” 라고 칭찬해 주셨습니다. 그리고 그 후에는 일본의 문화와 풍경, 식사에 감동한 것도 말씀해 주셨습니다. 제가 추천한 장소에 방문하는 것도 기뻐고 한국어를 칭찬받은 것, 제 나라인 일본에 대해 감동해 준 것이 무엇보다 기뻐했습니다. 저도 한국에 대한 리스펙트가 많다고 말했습니다. 한 시간 후 식사를 마친 부부가 저를 불렀습니다. 뭔가 그 부부에게 실수를 했을지도 모른다는 불안감을 느끼며 가보니 제가 한국을 너무 좋아하고 다시 한국에 가보고 싶어한다는 마음이 느껴져서 영수증 뒤에 추천 장소 15 개를 적어 보냈다고, 그리고 꼭 가보길 바란다고 말씀해 주셨습니다. 영수증 뒤에는 빼곡히 한국어로 장소 이름이 적혀 있었습니다. 한국어를 배우면서 언어의 깊이라는 벽에 부딪혀 제대로 의사전달을 하지 못해 자신의 한국어 실력에 실망할 때가 있었습니다. 하지만 지금까지 노력해 왔던 것들이 한일교류로 이어졌다는 것과 저의 한국에 대한 사랑이 현지인들에게 전달될 수 있었다는 것에 감동을 받아 눈물이 났습니다. 영수증이 처음으로 소중한 보물이 되었습니다.

지금까지는 한일교류에 기여하고 싶다는 생각이 강한 반면 그 방법에 대해서 고정된 틀을 가지고 있었던 것 같습니다. 하지만 짧은 대화를 통해서도 교류가 가능하고 그 증거로서 영수증을 볼 때마다 기뻐던 마음이 떠오르며 한국과 일본을 연결하는 자리에서 일을 하고 싶다고 결심을 했습니다. 단 한 장의 영수증, 그것이 제게 있어서는 한일교류의 밝은 미래를 보여주는 메시지가 되었습니다.



佳作

200 년 전과 같은 풍경

藤井 千裕 (盈進高等学校)

K-POP 아이들을 동경해서 한국어 공부를 시작했지만 정치나 역사에는 전혀 관심이 없었다. 선생님께서는 한국어 공부를 하려면 역사도 공부하는 게 좋다고 하셨지만, 나는 역사에는 전혀 관심이 없어서 그 조언은 듣지 않았다. 한국어 공부를 시작했을 때 한국에 대한 뉴스가 늘어나기 시작했다. 나는 정치 문제를 잘 모르지만, 평소 뉴스나 신문을 보고 일본과 한국이 충돌하고 있다는 것을 알게 되었다. 하지만 나는 한국어 공부를 멈추지 않고 인터넷에서 한국 친구들을 많이 사귀었다.

나는 해외 학교와 교류하는 동아리에 가입했다. 이번 여름, 내가 염원하던 한국학교와의 교류가 결정되었다. 그래서 우리가 사는 후쿠야마시를 소개하게 되었다. 과거 후쿠야마시 토모노우라에는 에도시대 조선통신사가 여러 번 왔었다. 선린우호의 사절이었던 조선통신사는 연관지에 다양한 문화를 남겨 두었다. 이는 쇄국 중임에도 불구하고 일본과 한국이 문화교류를 하고 있었음을 보여준다. 그것을 알고 조금은 감동했다. 여전히 역사는 싫지만 옛날에는 한국과의 관계가 나쁘지 않았다는 것을 알게 되었고, 조금이지만 역사공부의 중요성을 알게 되었다.

조선통신사가 온 시대로부터 200 년이 지난 지금, 나도 내가 사는 동네에서 한국 학생들을 대접했다. 교류회에서는 진지한 이야기도, 즐거운 이야기도 많이 했다. 내가 한국의 아이들을 동경하고 있는 것처럼, 한국의 학생들은 일본의 애니메이션이나 아이들을 동경하고 있었다. 그 밖에도 일본 음식이 맛있다는 이야기와 전통 기모노를 입어보고 싶다는 이야기도 들었다. 일본의 문화를 이해하고 체험하려는 자세에 매우 감동했다. 나도 한국의 문화를 깊이 알고 체험해 보고 싶다고 생각했다. 또 내가 나의 미숙한 한국어로 조선통신사 설명을 할 때도 그 친구들은 열심히 들어려고 해주고 맛장구를 쳐주어서 매우 부끄렀다.

조선통신사는 토모노우라의 경치를 보고 일본에서 가장 아름다운 경치라고 말했다고 한다. 우리도 같은 경치를 보고 함께 사진을 찍었다. 한국 친구들도 예쁘다고 여러 번 말해줬다. 200 년 전과 같은 경치를 보고 같은 감상을 갖는 것은 멋진 일이라고 생각했다. 에도시대, 쇄국 중에서도 교류를 그만두지 않았던 것이, 한일 양국의 관계가 나빠지는 가운데서도 서로의 문화를 좋아하는 사람들이 많이 있는 지금과 겹쳐지는 것 같았다.

나는 이번 교류로 같은 취미를 가진 한국인 친구들이 많이 생겼다. 옛날 사람들이 서로의 문화를 존중하고 우호관계를 이어갔듯이, 나도 계속 한국과 교류하고 싶다고 생각했다. 그래서 앞으로도 한국어 실력을 늘려나갈 생각이다. 그리고 조금만 역사를 공부해도 될까 생각하고 있다.



最優秀賞

자신감으로 이어진 생일여행

山極 尊子 (埼玉県)

43 세 생일, 1 박 2 일간 한국 여행을 떠났다. 목적은 친구 승희를 만나러 가는 것. 승희는 일본 직장 동료였다. 함께 일하면서 고민과 즐거움을 공유하다 마음의 친구가 된 그녀가 한국에 귀국한 후 5 년 만의 재회다.

이른 아침 인천공항에 내린 나를 승희는 변함없는 미소로 맞이해 주었다.
“타카코가 한국에 오면 꼭 데리고 가고 싶은 곳이 있어”
그렇게 말하면서 함께 간 곳은 서울에서 차로 1 시간 반 정도 거리에 있는 “아침고요수목원”이었다.

경기도 가평에 위치한 이 수목원은 1996 년 5 월에 개장하여 한국에서 가장 오랜 역사를 자랑한다. 약 10 만평의 광활한 부지에는 사시사철 4,500 여 종의 식물이 넘쳐난다. 한국적 느낌이 가득한 힘찬 가지들이 종횡무진 뻗어 있는 구역, 일상의 번잡함에서 벗어나 동화에서나 나올 법한 알록달록 아름다운 꽃들로 가득한 구역, 투박한 수많은 분재들로 아늑함을 선사해 주는 구역 등 다양한 테마로 정원이 조성되어 있어 몇 시간을 산책해도 전혀 지루하지 않았다.

“좀 설까” 라는 승희의 말에 우리는 풍차와 나무가 어우러져 마음을 치유해 준다는 테마 벤치에서 잠깐 휴식을 취했다.

하늘을 올려다보니 가지 사이로 비치는 햇살이 너무 아름답다. 나뭇잎 흔들리는 소리가 우리의 호흡과 겹쳐져 함께 잠시 눈을 감았다. 잠시 후 “생일 축하해 타카코, 멀리 떨어져 있지만 아이 키우느라 힘든 타카코를 위해 최소한의 힐링이라도 선물해 주고 싶었어” 라고 승희가 말했다.

평온, 편안함, 설레임... 여러 감정을 느끼고 있었는데 갑작스런 승희의 말에 나는 눈물이 멈추질 않았다. 육아로 너무 지쳐 있었던 나를 승희는 SNS 를 통해 알아차리고 있었던 것이다.

“사회인이었을 때는 나답게 빛났었다고 생각했는데 지금은 육아도 생각대로 되지 않고 일에도 복귀 못하면 어찌지 라는 불안도 있어” 라고 대자연 앞에서 나약한 말이 너털너털 쏟아졌다.

그러자 승희는 “이곳을 설립한 한상경 교수님도 46 세에 이 수목원을 만들었는데, 너는 아직 43 세야. 이제부터야” 라며 나를 꼭 껴안아 주었다.

그는 학자로서 배우고 연구하고 모색해 온 모든 철학을 46 세에 이 정원에 쏟아부어 한국 전통 정원의 미학을 현대적으로 재해석했다고 한다.

승희와의 수목원에서의 한국 여행은 내게 잊을 수 없는 생일여행이 되었고 하루하루에 대한 활력과 큰 자신감으로 이어졌다. 한국의 자연과 친구가 강하게 내 등을 떠민 것이다. 나는 온 힘을 다해 오늘을 빛낼 수 있다고 믿는다.



優秀賞

사랑하는 오지라퍼들

南口 江美 [東京都]

“굿샷!” 오잘공!(오늘 가장 잘 친 공) 푸른 잔디에서 오가는 신기한 말들...한국인들과 골프를 칠 때 이런 아리송한 골프 용어들이 튀어나온다. “나 양파야~” “양파라니?” 난데없이 들려오는 말 하나하나에 마음이 춤춘다. 양파는 간단히 말하면 나처럼 서툰 골퍼나 초보자를 위해 덤을 주는 한국만의 독특한 룰이다. 일본에서는 골프에 덤이라고는 없다. 골프에도 문화 차이가 있다니. 얼마나 재미있는가!

이렇게 골프장 마저도 나의 한국어 교실이 되었다. 한국어를 배우면서 가깝게 지내는 언니가 생겼고 그 언니의 초대로 함께 한국식 골프를 하게 된 것은 나에게 정말 좋은 인연이었다. 멤버는 4,50대 아줌마 7명이고 모두 남편의 일로 일본에 사는 한국인들이다. 한국어에 자신이 없었지만 당일치기 유학이라는 마음으로 참석했다. 그래서 내 머릿속은 골프보다 한국어로 가득 차 있었다. “한국어 잘못해서 실례가 되면 어쩌나?” 긴장해서 말이 더 안 나왔다. 나이 들어 외국어를 배우는 것부터 쉽지 않았지만 모두 나를 따뜻하게 맞아주었고 한국어로 골프를 시작한 그날부터 언니들과 정기적으로 만나게 되었다.

“로마에 가면 로마 법을 따르라” 라는 말이 있다. 여기가 일본이지만 상황이 한국이다. 마땅히 한국 법에 따라야지. 언니들의 문화에 뛰어들어보니 상상 이상으로 따뜻한 곳이었다. 내 나이가 제일 어려서 막내라고 더 잘 챙겨 준다. 플레이할 때도 먹거리를 잔뜩 챙겨와서 내게도 함께 나눈다. 그래서 운동보다 소풍이라는 생각이 들 정도다. 에너지 넘치는 언니들은 오지랖일 정도로 챙겨 주는 것이 웃기면서도 따뜻함이 느껴졌다. 한국인은 짧은 시간에 적극적으로 가까워지고 따뜻함이 많은 것 같다. 초대해준 언니가 “한국 아줌마들은 ‘오지라퍼’ 지?”라며 웃었다. 오지랖에 애정이 담겨 있는 것을 일본인인 나도 느낄 수 있었다. 한국어 선생님께서 한국어의 “정”은 일본어로는 설명하기 어려운 말이라고 하셨는데 언니들과 만날수록 “이게 바로 그 정이구나” 하고 느꼈다.

한국 법에 따른 덕분에 한국 드라마만 보던 나의 좁은 세계가 넓어졌다. 오지랖이고 힘차고 공감력이 뛰어난 정 많은 아줌마야말로 말만으로는 설명하기 어려운 한국만의 따뜻한 문화 그 자체다. 그로부터 배울것이 많을 뿐만 아니라 나에게 용기와 꿈까지 주었다. 언젠가 한국어로 남에게 도움이 되고 싶고 또 받은 정을 다음에는 남에게도 보내고 누군가에게 멋진 오지라퍼가 되고 싶다.

언니들~ 막내가 언니들 사랑하는 거 아시죠? 우리 오늘도 아줌마 파워로 오잘공!



優秀賞

꿀맛이란 어떤 맛인가? - 밤막걸리를 꿀맛이라하는 이유에 대하여 -

藤原 亮輔 [岩手県]

아이고 머리야...

어제는 너무 마신 것 같다. 호텔에 어떻게 들어왔는지 기억이 나지 않는다. 나의 한국 첫출장의 마지막날 한국본사 사람들과 막걸리를 마셨다. 마시기도 편하고 맛있어서 꽤 많이 마셨는데 그 대가는 꽤나 큰 것 같다.

일단은 물부터 마시기 위해 냉장고 문을 열었다. 물을 마시려고 생수에 손을 가져간 순간 옆에 꿀물이라고 적힌 노란 음료가 눈에 띄었다.

응? 이게 뭐였더라? 아 어제 한국본사쪽 상사가 헤어지기 전에 다음 날 일어나면 마시라고 챙겨주셨던 음료였지. 꿀물? 이걸 무슨 음료지? 꿀인가? 물인가? 정체를 알 수 없었지만 일단은 용기를 내서 마셔봤다. 오? 굉장히 달콤한 액체가 목구멍을 타고 흘러들어왔다. 숙취로 지친 속이 구원받는 느낌이다.

꿀물을 마시고 어느 정도 정신을 차린 뒤 체크아웃을 하고 호텔을 나왔다. 공항전철을 타자 금방 인천공항에 도착했다. 출국심사를 간단히 마치고 대합실로 들어와 대중 자리가 비는 곳 아무 곳이나 앉았고 갑자기 목이 말라 아침에 마시다 남은 꿀물을 마시려고 하는 순간 어제의 기억이 다시 떠올랐다.

“이야~ 이거 정말 [꿀맛]이네요”

상사가 파전을 한 점 먹고 막걸리를 마시더니 굉장히 행복한 표정으로 말했다.

“오 이걸 꿀로 만든 막걸린가요?”

주문할 때 잠시 자리를 비웠었기에 어떤 막걸리를 시켰는지 몰랐던 나는 궁금해서 물어봤다. 그러자 상사는 박장대소를 하며, 막걸리에 꿀이 들어가서 [꿀맛]이라고 하는게 아니라 한국에서는 관용구로 무언가 엄청 맛있어서 행복하다고 느낄 때 [꿀맛]이라 하는 것이라 했다. 그게 어떤 맛이든 말이다. 심지어 매운 걸 먹어도 [꿀맛]이라고 할 수 있으며, 음식을 먹을 때 뿐만이 아니라 무언가에 행복함을 느낄 때도 [꿀맛]이라고 한다고 했다.

어제도 느낀 것이지만 역시 [꿀맛]이란 내게는 아직 미지의 맛인 것 같다. 내 생각에는 어제 마신 밤막걸리보다는 이 꿀물이 훨씬 더 합리적으로 [꿀맛]인거 같은데.

어제 일을 회상하는동안 어느덧 떠날 시간이 되었다. 생각해보면 이번 한국출장은 내게 너무나 행복한 시간이었다. 맛있는 한국음식도 많이 먹고, 좋은 한국사람도 많이 만나고... 여러모로 잊을 수 없는 시간이 될 것 같다.

아 그러고보니 무엇이든 상관없이 행복할 때 쓰는 표현이라면... 이번 한국출장에서 보냈던 이 며칠간이 내게는 [꿀맛]이었던 것 같다. 즐거웠었던만큼 아쉬움이 가득하지만 이제는 가야 할 시간이다.

안녕 한국

안녕 나의 [꿀맛]이었던 시간들



佳作

부모님에 대한 마음

齋藤 可奈 [新潟大学]

한국은 유교 사상의 영향으로 부모님을 존경하고 잘 따르고 있습니다. 저는 한국 문화 중에서 이 문화를 제일 좋아합니다. 그러나 지금까지 일본 학교에서 간단히 배운 한국 유교 문화는 상하관계가 엄격한 이미지이며 제일 좋아하는 문화라고까지 말할 정도로 좋은 이미지는 아니었습니다.

그렇지만 좋지 않은 이미지가 180 도 바뀌게 된 이유는, 한국어 수업을 듣고 다양한 한국의 예능 방송을 보면서 느낀 점이 있었기 때문입니다. 한국 방송에서는 일본보다 더 자연스럽게 출연자들이 그들의 부모님과 함께 출연하여 좋은 추억을 만들거나 부자 간의 재미있는 에피소드 등을 이야기하고 또 “부모님을 너무 존경해요.”, “엄마, 아빠 사랑해요.”, “부모님을 행복하게 해 주고 싶어요.” 라고 말하는 장면을 많이 봤습니다. 일본에도 유교 문화가 있고 자기의 부모님이나 가족을 소중히 여기고 있지만 시청자들 앞에서 가족을 사랑한다는 말을 좀처럼 들어본 적이 없습니다. 일본 방송에서 가족 이야기를 할 때는 그저 모두가 웃을 수가 있는 이야기나 다큐멘터리처럼 눈물 없이 볼 수가 없는 슬픈 이야기가 많습니다. 그래서 한국 방송을 볼 때면 한국 사람들의 몸에 배어있는 부모님에 대한 사랑과 존경심을 느낄 수가 있어서 감동할 때가 많습니다.

저희 아버지는 제가 어렸을 때 돌아가셔서 어머니 혼자서 저희 형제를 키워 주셨습니다. 큰오빠와 언니는 저에게 자주 “엄마를 항상 생각하고 집안일을 도와드려야 해.” 라고 자주 말했습니다. 어릴 때는 몰랐지만, 저는 고등학생이 되고 나서도 부끄러워서인지 어머니한테 직접 감사의 마음을 전하지 못했습니다.

그러나 한국 방송에서 아이들이 마음에서 우러나오는 부모님에 대한 감사의 표현을 보면서 저도 용기 내서 어머니에게 감사의 마음을 전하고 싶어졌습니다. 그래서 그해의 어버이날에 처음으로 손 편지와 카네이션을 드리며 그동안 하지 못했던 감사의 마음을 전할 수가 있었습니다. 그리고 한 송이의 꽃 선물이었지만 어머니가 정말로 기뻐해 주시던 모습이 아직도 눈앞에 선합니다.

대학생이 되고 아르바이트도 하는 지금은 더 좋은 선물을 드릴 수도 있고, 어머니에게 있는 그대로의 제 마음을 전할 수가 있게 되었습니다. 이처럼 한국 사람들이 자신의 부모님을 사랑하고 존경하며 소중히 하는 마음과 그 마음을 진심으로 전하는 한국 문화가 저는 정말로 좋습니다.



佳作

음식문화에서 보이는 한국인

滑川 理美 [東京女子大学]

여러분은 한국인에 대해 어떤 이미지와 인상을 지니고 있는가? 내가 ‘음식문화에서 보이는 한국인’이라는 주제를 정한 이유는 작년 8월 한국에 처음 방문했을 때 느꼈던 음식문화의 차이나 거기에서 엿보이는 인간성, 그리고 여행에서 빼놓을 수 없는 즐거움의 하나인 식사에서 많은 감동과 자극을 얻었기 때문이다.

먼저, 한국에서는 식사예절이 매우 중요시되는 것 같았다. 친척 모임에서 술을 마셨을 때 윗사람의 시선을 피해 살짝 얼굴을 옆으로 돌리고 입가를 손으로 가리는 모습이나 술을 따를 때 병을 들지 않은 쪽의 손을 자신의 팔꿈치나 가슴에 댄 채 상대방의 잔에 따르는 형부의 모습은 잊혀지지 않을 만큼 인상적이었다. 이러한 식사 예절에서도 한국 사람들은 윗사람을 공경하는 문화를 가지고 있었고, 그 모습에 감명을 받기에 충분했다.

그리고 식사할 때는 기본적으로 화기애애한 분위기로 상대방의 앞접시에 음식을 덜어주는 모습도 자주 볼 수 있었다. 한국인에게 식사란 단지 음식을 먹는 행위를 넘어 음식을 공유하면서 공동체적 커뮤니케이션을 도모하고 있는 것처럼 느껴졌다. 이처럼 한국인들은 윗사람을 공경하는 문화가 식사에까지 녹아 있고 식사를 통해 보다 친밀한 인간관계를 구축하고 있는 것이다. 또한 체류 중 몇번이나 ‘밥 먹었어?’라는 인사말을 들었다. 한국인은 식사를 통해 사람과의 인연을 소중히 유지하고, 한번 함께 식사한 사람은 ‘남’에서 ‘우리’의 관계로 비약하는 모습을 발견할 수 있었다. 이처럼 삶의 순간순간에서 사람과의 인연과 유대감을 소중히 여기는 한국인의 모습은 정말 매력적이어서 그 모습에 시선을 빼앗길 정도였다.

2년전 일본의 신문에서도 타계 소식이 소개된 한국 시인 김지하 씨의 작품 중에서 ‘밥은 하늘입니다. 하늘을 혼자 못 가지듯이 밥은 서로 나눠 먹는 것’이라는 씬구는 그야말로 한국인에게 식사란 단순히 먹는 행위를 넘어 공동체 이념과 평등을 실현하는 매개인 것이다. 실제로 한국인 친척들과의 식사를 통해 밥과 사람 사이의 평등과 공유에서 얻을 수 있는 기쁨을 나는 다시 한 번 확인할 수 있었다. 시인의 말마따나 밥은 서로 나눠 먹음으로써 모두가 오롯이 밤하늘의 별을 바라볼 수 있는 것이다. 그리고 하늘을 내 몸속으로 맞이할 때 비로소 사람들과의 평등과 평화도 실현될 수 있다는 한국인들의 식사 공동체적인 사고방식을 엿볼 수 있다.

사람은 매일 먹지 않고는 살아갈 수 없다. 한국인의 먹는 행위 그 너머의 ‘같이 먹는 행위’를 통해 나는 한국의 식사문화와 한국인의 밥에 대한 사고방식을 느낄 수 있었다. 그리고 한국인이 생각하는 식사란 단지 먹어서 배를 채우는 일상적인 행위와 영양을 섭취하는 것 그 이상으로 이웃과의 공동체적 커뮤니케이션이라는 점을 배웠다. 일본에 ‘모테나시(대접)’라는 말이 있듯이 한국에서는 ‘나눔다’라는 말이 있다. 나는 이번 한국 여행을 통해 한국이 사람과 밥을 나누고, 사람과 정을 나누는 따뜻한 나라임을 느꼈다. 그리고 지금의 일본, 아니 현대 자본주의 사회에서 필요한 ‘나눔’과 ‘공동체 의식’의 중요성을 새삼 의식하게 된 계기가 되었다. 많은 한국인들처럼 식사를 통해 사람과의 인연과 유대를 소중히 여겨야겠다는 다짐을 하면서 말이다. 언제 우리 밥 한번 먹어요!



佳作

“엄마, 사랑해요”

春日 智子〔東京都〕

“엄마 사랑해!” 대학로 사거리에서 여자 목소리가 갑자기 들려 왔다. 신호를 기다리고 있던 내가 옆으로 살짝 보니 목소리 주인 공은 교복을 입은 여학생이었다. 아무래도 엄마와 스마트폰으로 대화를 하고 끊으면서 하는 말 같았다.

‘엄마 사랑해라니?!’

‘사랑해’ 는 한국 드라마에서는 많이 들리는 대사였는데 드라마이기 때문에 쓰는 말이지 실제로는 잘 하지 않는 말이라고 생각해 왔다. 그런데 ...

‘정말로 하는구나 ...’ 실제로 직접 들어본 것은 처음이었다. 또 그 여학생이 아주 자연스럽게 말했던 것이 인상적이었다. 그 때 깨달았다. 나는 그 말을 우리 엄마한테 한 번도 한 적이 없었다는 것을 ...

생각해 보니 한국어를 만나게 된 계기는 엄마였던 것 같다. 엄마는 3 개월 정도 병원에 계셨다. 엄마가 입원하신 병원으로 가는 길에 있는 책방에서 문득 눈에 띄는 작은 책이 있었다. 그것은 한국어 단어집이었다. 좀 어이없지만 나는 병실에서 소설을 읽을 기분 도 아니었기 때문에 그것을 구입했다.

그 작은 책에는 기본적인 단어부터 드라마에서 등장하는 표현 등이 아기자기한 일러스트와 함께 쓰여 있었다. 나는 매일 병실에서 엄마가 주무시는 동안 그 책을 계속 보았다. 그러는 사이 치료 중이셨던 엄마는 무지개 다리를 건너가셨다. 그렇게 나는 혼자가 된 후 쓸쓸한 마음을 달래려고 더욱 한국어 공부에 빠져들었던 것이다. 한국어는 엄마의 빈자리가 되어 주어 점점 마음이 치유되었다. 그로부터 몇 년이 지난 지금은 한국어 공부가 내 생활의 일부로 자리잡게 되었다. 또 그동안 한국어를 통해서 좋은 친구들도 생겼다. 이걸 모두 다 엄마 덕분일지도 모른다.

어쨌든 내가 보기에 한국 사람들은 애정표현이 뛰어난 것 같다. 예를 들면 커플들은 기념일을 세어 그날을 축하하거나 첫눈 오는 날에는 보고 싶은 사람을 만나러 가기도 한다고 한다. 반면에 애정표현이 약한 일본 사람들은 기념일은 세지도 않거니와 눈이라도 오면 전철이 멈추기 전에 집에 빨리 돌아가려고 생각할 것이다. 또 자신이 생각한 것을 굳이 말하지 않는 사람도 많다. 그런 면에서 자연스럽게 표현하는 한국 사람들을 좀 더 본받아야 할지도 모른다. 나도 앞으로는 내 마음을 잘 전달해 보려고 한다.

하늘나라에 계신 엄마! 만약에 내가 부끄러워하면서 “엄마 사랑해요” 라고 말하면 기뻐해 주시겠어요?

“엄마가 더 사랑해 “라고 말씀해 주실래요? 나는 오늘도 마음속으로 엄마한테 말을 건넨다! 엄마! 사랑해요!



佳作

아버지와 한국문화

目黒 由貴子〔北星学園大学〕

그런 김치 냄새 나는 놈이 좋으면 그냥 집 나가서 한국이든 가버려!”

오해를 안 받기 위해 먼저 해명한다. 이 말은 내가 아니라 우리 아버지 입에서 나온 말이다. 나한테 내뱉은 말은 아니지만, 그래도 생각 날때마다 기분이 나빠지는 저주 같은 말이다.

“겨울연가” 가 한류 붐을 일으킨 2004 년, 당시 “윤사마 “ 라는 극존칭으로 사랑을 받고 있었던 배우 배용준에게 우리 어머니도 예 외 없이 빠져 계셨다고 한다. 그때 5 살도 안된 어린이였던 나도, 어머니의 피아노로 듣는 그 드라마의 OST 를 아직도 새록새록 기억하고 있다. 그때부터 20 년 지난 지금도 어머니는 종종 배용준과 마치 사귀고 있었던 듯이 당시의 일을 너무나 행복하 말씀해 주 시곤 한다.

지금 말로 최애 같은 존재였을 것이다. 어머니는 “윤사마” 굿즈와 한국어 교과서 등을 많이 사서 사소하고 행복한 취미생활을 즐기 고 계셨다. 하지만, 그 행복은 계속 이어지지지는 않았다. 극한의 혐한인 우리 아버지는, 엄마가 몰래 가지고 계셨던 굿즈와 한국어 교과서를 찢다 책상위에 늘어 놓고 서두에 쓰여 있는 폭언을 하셨다.

그런 현실을 비웃 듯이, 둘 사이에 태어난 나는 2004 년의 엄마보다 훨씬 더 한국에 빠져있다. 아버지의 의견을 부정할 생각은 하 나도 없지만, 딸 입장에서는 내 취미나 공부하고 있는 언어를 공유 못 한다는 건 가끔 외롭기도 하다.

어떤 사람들은 “양국의 사이는 점점 좋아지고 있다 “ 라고 한다. 그런데 나는 우리 아버지 같은 분의 딸로서 그 말에 동의할 수가 없다.

딱 하나만 우리 아버지하고 한국을 연결 시켜주는 한국 문화가 있다면 그것은 바로 한국 음식이다. 아버지는 우리 가족이 자주 가는 고기집에서 꼭 오이김치하고 나물을 시켜 드신다. 고기를 마음껏 드시며 육개장 라면 이라는 메뉴를 순한 맛으로 주문하고, 너무 맛 있게 드시기도 한다. 한국인을 “조센진” 이라고 부르시는 아버지가, 20 년전엔 “윤사마” 를 미워하셨던 아버지가, 그 고기집에 가 는 날만큼은 한국음식을 즐기고 있는 모습을 보여주신다.

역시 맛있는 것은 언어와 국경을 뛰어넘을 수 있는 신기한 매력이 있을지도 모른다. 아버지가 시키신 오이김치를 한 입 먹으면서, 어쩌면 밝을 수도 있는 양국의 미래를 머리속에 그려본다.



最優秀賞

田ヶ谷 直美〔埼玉県〕

ポジャギ縫う はぎれもすべていとおしく

優秀賞

堀 綾子〔東京都〕

キムジャンの やさしさ熟し おすそ分け

村田 香織〔埼玉県〕

短縮語伸ばして脳のストレッチ



佳作

新澤 明子〔大阪府〕

オルシンと 呼ばれたせいで ハデ目買う

山口 幸子〔静岡県〕

あいさつは「今、何観てる？」韓仲間

高木 弘子〔茨城県〕

サランヘヨ 70 手前で 使いだす

岩田 美桜〔洗足学園高等学校〕

サイン会握ったメモは汗で濡れ



最優秀賞

森 勸喜 [慶應義塾大学]

손님 오이소! 웃으며 내 손 끄는 부산 아지매

優秀賞

安倍 遥菜 [新潟大学]

매운 찌개에 빨개진 내 얼굴 보고 오해한 남사친

白田 卯見 [京都国際中学校]

무궁화처럼 나의 꿈도 희망도 피어나기를



佳作

伊藤 大河 [電気通信大学]

그런데인가 그래서가 아닐까 아냐 그러면

谷垣内 鮎乃 [大阪府]

어명이라며 사극에 빠진 남편이 일을 시키네

明 ハル [白頭学園 建国高等学校]

문화재 탐방, 북청 사자놀이에 지화자 좋~다

瀧脇 真優菜 [東京都]

한국 식당의 화려한 오침반상 군침 주르르





Lined writing area with 20 horizontal lines.



